

聖徒の道 6 1975

いかなる使徒とい
えども、永遠におい
て、完全なる福音の
律法に忠実に生活し
た長老よりも高い位
に昇栄するというこ
とはないのである。

ブルース・R・マッコンキー
『長老』より



6 月号 も く じ

長老.....	ブルース・R・マッコンキー.....	241
質疑応答.....		248
南アメリカ地域総大会開かる!!.....	ラリー・ヒラー.....	250
南アメリカ南部の教会.....		256
おもちゃばこ.....		261
せいさん.....		262
ライオンとラビ.....		264
音楽って?.....		266
後ろのものを忘れ.....		269
永遠の絆.....	マーク・E・ピーターセン.....	270
死の後には?.....	リグランド・リチャーズ.....	274
山の上にある町.....	ゴードン・B・ヒンクレー.....	277
総大会を人生の転機とするために.....	J・トーマス・ファイアーズ.....	280
引き延ばしてはならない.....	エルドレッド・G・スミス.....	283
ローカルニュース.....		286

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン	ゴードン・B・ヒンクレー
マーク・E・ピーターセン	トーマス・S・モンソン
デルバート・L・ステイプラー	ボイド・K・パッカー
リグランド・リチャーズ	マービン・J・アシュトン
ヒュー・B・ブラウン	ブルース・R・マッコンキー
ハワード・W・ハンター	L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアーズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー
(配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
(教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼 修一

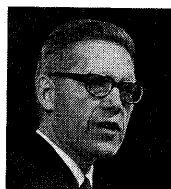
聖徒の道 6 月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布 5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan



『長老』



十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

兄弟たち、あなた方は長老という職をどう心得ておられるだろうか。だれかがこう尋ねる。「教会でのあなたの神権の職は何ですか」

するとこういう答えが返ってくる。

「ただの長老ですよ」

ただの長老と言えるのだろうか。十二使徒評議員の兄弟たちが長老と呼ばれるのを誇りに感じ、また大管長に対する敬称として「第一の長老」という名称が用いられることが啓示され（教義と聖約20：2、5）、さらに数百万の人々が聖なる神殿での身代りの儀式によってこの長老の職に聖任されるというのに。

ただの長老と言えるのだろうか。この職により人は新しくかつ永遠の誓約に入って妻子と永遠の絆で結ばれる。また自らの子孫の祝福師として永遠にイスラエルの家の中でその位置を占めるための備えをさせるのもこの職である。さらに主の宮居において完全なる祝福を受けるのに必要なのもこの職であるし、日の光栄の最高の天界での永遠の昇栄の扉を開くのはまさしくこの職なのである。そして人はその最高の位を得て神と似た者となる。

ただの長老と言えるのだろうか。長老は、福音を宣べ伝え、神の王国を建設し、聖徒たちを全き者とするために聖任された人である。また長老は神に仕える者であり、その言葉はすべて聖典の言葉である。そしてこの職は「天の王国の奥義を受くる特権を有し、諸々の天は彼らに開かれ、神の『長子』の教会とその総集いと親しき交通を享け、父なる神と新たな誓約の仲保者イエスとの臨在と親しき交通とを享くる」職なのである。

（教義と聖約107：19参照）

ただの長老と言えるのだろうか。教

会の長老の持つ神権は大管長の持つ神権と同じだというのに。いかなる使徒といえども、永遠において、完全なる福音の律法に忠実に生活した長老よりも高い位に昇栄するということはないのである。

長老とはどのような人であろうか。長老は主イエス・キリストの教職者であり、聖なるメルケゼデク神権を持っている。すなわち同胞に教えを説くにあたって、長老の長である主に代わって働くよう委託されている主の代理人なのである。その使命は福音を宣べ伝え、聖徒を全き者にすることにある。

長老とはどのような人であろうか。**長老は羊飼いである。良き羊の群れのために働く羊飼いである。**こう記されている。「あなたがたはわが羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神は言われる。」(エゼキエル34:31)さらに使徒の時代に第一の長老であったペテロはこう書き送った。「そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりである……あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」(1ペテロ5:1-4) **主の王国にあって常任教職者である長老は、神の羊の群れを牧し、監督し、群れの模範となるよう命じられている**ということを知っていただきたい。

長老とはどのような人であろうか。「主『みたま』によりてその教会の長老たちに言う。いざ、汝らの悟らんためにわれら共に論ぜん。……この故に、

主なるわれ汝らにこれを問う。そもそも、汝らは何のために聖職の按手任命を受けたるか。真理を教えんために遣わされたる『慰め主』、すなわち『みたま』によりてわが福音を宣べんためなり。」(教義と聖約50:10、13、14)

長老とは、人の救いのために福音を教えるよう遣わされた主の代表者なのである。

キリストは人のために命を捧げられた。人の値はそれほど大いなるものであり無限なのである。それをだれが測り得よう。そして**人の値がそれほど大きいのであれば、その人を天父の王国に連れて行くよう委託されている長老の値は、どれほど偉大であろう。**では、すべての長老が羊の群れを牧し、監督し、群れの模範となるのだろうか。予言の答えに耳を傾けてみよう。「主なる神はこう言われる、わざわざいかなるかな、自分自身を養うイスラエルの牧者。牧者は群れを養うべき者ではないか。……あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、傷ついた者をつつまず、迷い出た者を引き返らせず、うせた者を尋ねず、彼らを手荒くきびしく治めている。……主なる神はこう言われる、見よ、わたしは牧者らの敵となり、わたしの羊を彼らの手に求め……。」(エゼキエル34:2、4、10)

末日聖徒イエス・キリスト教会は、地上における神の王国である。民主制でも共和制でもないし、寡頭制でも独裁制でもない。王国なのである。上から下への関係であり、主が言われたことに僕が従う。長老は世に出て行き、人々は長老から教えを受けるのである。

私たちに課せられた責任で、今非常に必要とされている事柄は何であろうか。それは、長老たちを全き者にし、群れの牧者とすることである。そうす

れば、羊が神の言葉に飢えて死ぬようなことはないだろう。今日教会において最も必要とされていることは、長老たちを訓練し、彼らが「主の羊の群れの牧者」となれるようにすることである。

長老たちの救いの源となるものは何であろう。秘法は何もない。何の努力も払わずに不活発な人を活発にしてみよう魔法のつえなど存在しないのである。私たちに与えられているのは、教会の非の打ちどころのないプログラムである。そして、人生を福音の祝福に満ちたものにしたいと願っている人々の胸を打つものが、必ずやそのプログラムの中にあるのである。私たちはこの問題を処理しようとするとき(他のいかなる問題もこれと同様であるが)、完全な承認を得られる解決は、神権コーリレーションの枠内で行なわれるということを念頭に置いて、処理する必要がある。

神権コーリレーションとは何であろうか。これは教会の管理運営制度で、教会の全プログラムをひとつのプログラムにまとめて運営するものであり、教会の全会員を参画させるものである。この制度は、現在の教会組織の枠内で運用しなければならない。問題が生ずるたびごとに委員会や別の組織を作り、その解決をはかるという方法が長い間取られてきた。しかし私たちは啓示された神権組織を利用する。つまり教義と聖約第20章にあるように、ホームテチャーを使い、またワード部神権役員会、コーリレーション評議会を通して神権および補助組織間の相互調整をはかるのである。ハロルド・B・リー大管長は神権コーリレーションを「単に神権を主が置かれたところに置き、家族が本来の機能を果たせるよう援助するものである」と定義した。

教会プログラムの運営に関して指針となる3つの基本原則が、神権コーリレーションにはある。それは次の基本概念から導き出される。家族はこの世にあっても永遠にわたっても、最も重要な組織であり、教会ならびにそのすべての組織は、奉仕機関として家族を助ける立場に立つ。ホームティーチャーは主と監督と神権指導者の代理人であり、父親や家族、個人が教会ならびにそのすべての組織から助けを受けられるように援助する。従って神権コーリレーションの三原則は次の通りである。

1. すべての事柄は家族と個人を中心に于行なわれる。家族と個人は教会においてあらゆる事柄を行なう。伝道、系図、個人の福祉について責任があるのは家族ならびに個人である。教会は、家族および個人のこの第一の責任を肩代わりするため、宣教師を召したり、委員会を設けたりはしない。ワード部の神権系図活動について責任が

あるのは、大祭司グループリーダーではない。ワード部やステーク部の伝道活動について責任を負うのは、ステーク部宣教師や専任宣教師ではない。双方共責任は家族と個人にあり、教会にあって特別な職に召されている人々は、家族と個人を助けるだけである。

2. 教会ならびにそのすべての組織は、奉仕機関として家族を助ける立場に立つ。宣教師や委員などいろいろな分野において召されている専門家は、家族を助けるために召されているのである。従って子供を光明と真理の内に育て、彼らに福音の原則を教えるのは、教会の組織ではなく両親である。教会の組織は、両親が主より与えられた仕事を果たすのを援助するために設けられている。正確に言えば、私たちが宣教師を助けるのではなく、宣教師が私たちを助けるのである。隣人に警告を与えるのは私たちの第一の責任であり、たとえば専任宣教師のような人々は、教えるという段階で私たちを助けるように召された専門家であると言えよう。

3. ホームティーチャーは主と監督と神権指導者の代理人であり、父親や家族、個人が教会ならびにそのすべての組織から助けを受けられるように援助する。教会のホームティーチング制度の最大の弱点が、利用されないままに放置されているという点にあることは、疑いのないところであろう。ホームティーチャーにその本来の仕事を行なわせずに委員会のようなものばかりやたらに作り、それでいてなぜホームティーチャーはやる気がないのであるか、と不思議がっているのである。長老を訓練したいと思うならば、新たな組織などは設ける必要はない。ホームティーチャーをよく働かせ、今ある組織を十二分に活用することである。

教会はすべての長老を必要としてい

る。ひとり残らず。教会は完全にならなければならない、また福音は生ける者すべてに宣傳伝えられなければならない。今よりも大勢の宣教師がいなければ、全世界35億の人々に教える道は閉ざされてしまうのである。私たちには助けが必要である。そしてそれは、不活発な長老および長老見込み会員から始めなければならない。

義務を果たそうとしない長老を活発にさせるのは、だれの責任だろうか。優先順位を明確にしよう。第一のしかも最大の責任はその長老自身にある。彼はバプテスマのときに主に仕えたと誓約している。そして大神権を受けたときには、その召しを全力を尽くして遂行すると約束したのである。問題は自分自身の救いである。主のみもとに帰り主の祝福を求める義務はその人個人にあるのである。

長老の活発化の第二の責任は家族にある。救いは家族に関わる事柄である。教会の行事に参加して得られる最大の





祝福は、個人と家族にもたらされる。その中でも主流を占めるのが、永遠にわたって家族の絆を保つことができるという点であろう。

個人と家族の次に来るのが教会であり、教会は救いを得させるところである。教会は主の組織であり、あらゆる人々は、主のみ前に行くために何をしなければならぬかを教会を通して知る。ほとんどの場合、活発化の最初の段階は、教会のある特定の地位にある人がその不活発な人に働きかけるということから始まる。たとえばその人のホームティーチャーなどである。活発化をはかる上で、教会への出席を細部にわたって規定するようなことは、私たちの目的でもなければ本領とするところでもない。進め方はいろいろあり、その働きには靈感のみたまが常に宿るに違いない。しかしそれはあくまでも神権コーディネーションの枠内で行ない、今ある組織やプログラムを用いなければならないのである。

ステーキ部における長老の再活発化の責任はステーキ部長にある。ステーキ

キ部長はステーキ部の管理長老であり、ステーキ部メルケゼデク神権委員会の長として働く。そしてこの業の遂行をステーキ部長から委任されたひとりの副ステーキ部長が、副委員長を務めるのである。ステーキ部長はステーキ部メルケゼデク神権委員会から援助を受けるが、それと同時にステーキ部内におけるあらゆる資力を、可能な限り活用することができる。またステーキ部長は高等評議員に2、3の定員会を援助し、共に働くよう割り当てることもできる。しかしながら、ステーキ部長が再活発化において特に優先して活用しなければならないのは、監督と長老定員会の会長の働きである。

高等評議員は揺るぎない信仰と良識を具え、霊的にも成熟した人で、ステーキ部内においても最も有能な人々である。彼らはステーキ部長の目であり耳であり声であると言えよう。ステーキ部メルケゼデク神権委員会に属する一人一人の高等評議員が、ステーキ部における主な割当てとして2、3の長老定員会に対して援助と指針を与える特権を得たとしよう。彼は、長老定員会の運営の実権を奪ってしまうことがないように十分注意する必要がある。教会における広汎で豊富な経験を基として、どのような忠告をするのが賢明であり正しいのかをよく考えなければならない。

ステーキ部長の行なう仕事の中で、次の3点以上に重要なものはない。すなわち(1)定員会指導者を訓練する、(2)長老定員会会長と定期的に会い、指示と割当てを与える、(3)長老定員会会長との神権個人面接を定期的に行なう(副ステーキ部長に委任してもよい)、ということである。

長老定員会はワード部ごとに組織される。ワード部に所属する長老見込み

会員は全員定員会に集い、長老と同じ訓練と指示を受ける。これによって彼らは、メルケゼデク神権を受け、定員会の会員になる準備をするのである。長老定員会会長はすべての長老および長老見込み会員を見守り、強める責任を持つ。

長老の再活発化について、監督は個人的に非常に重要な役割を果たす。監督はワード部を管理するイスラエルの判士である。彼は百分の一と献金を受け取り、神殿推薦状を発行することがふさわしいかどうかを決定する。また監督はメルケゼデク神権の職に昇進する人を推薦する。彼は兄弟たちをワード部の中の責任に召す。また管理大祭司としてワード部神権役員会やワード部評議会を管理し、長老定員会会長をはじめ、会の構成員に助言を与える。監督は長老定員会会長から神権評価を受ける。

しかし再活発化プログラムの実際面での詳細にわたる運営は、長老定員会会長に任せなければならない。定員会会員の管理は会長が行なうべきである。彼は「共に会議を開きて誓約に従ってこれを教」えなければならない。(教義と聖約107:89) 定員会会長は、定員会に属する人々の物心両面にわたる福祉に対して責任を持つ。そして彼らを天父の王国に導くのである。また長老定員会会長の責任は、ワード部の長老見込み会員まで及ぶ。監督を除き、ワード部にあって長老定員会会長ほどの責任を持つ人は他にいるだろうか。

兄弟たちの再活発化という責任があまりにも重過ぎるために、このプログラムはしてもむだだと思っている長老定員会会長も少なからずいることだろう。こう思うひとつの理由は、不活発会員を救うために何か特別なプログラムやシステムを工夫しなければならない



いという追い立てられたような気持ちが長老定員会会長の側にあるということである。しかし実際には、再活発化の方法はすでに備えられているのである。その方法はどこでも利用でき、また容易に運用することができる。またその方法を用いれば、重荷は多くの人々の肩に分かれ、そのくびきは負いやすく荷は軽くなる。

再活発化の過程は次の通りである。

(1) ホームティーチャーを使う、(2) 教会ならびにそのすべてのプログラムを利用する、(3) 定員会自体を正しく運営する。最も効果的な再活発化の方法は、一対一で、また家族対家族で行なう方法である。すなわち個人的な接触であり、友だちになることであり、フェロシップである。これをなすにホームティーチャーほど適格な人はいらるだろうか。ホームティーチャーを使って再活発化をはかろうではないか。

ホームティーチングに代わるものはない。長老や長老見込み会員の再活発化のために特別なフェロシップ委員会を召す必要はない。フェロシップ活動のために特別な召しを行なったり、特別な割当てをしたりする必要はないのである。私たちはホームティーチャーを使う。ホームティーチャーのこの働きは啓示によって命じられたものである。ホームティーチングは教会にあって最も有力な手段と言える。ホームティーチャーは教会員の家庭を訪れ、聖徒を見守り、強め、彼らの生活の中に邪曲なことがなく家族がその義務をよく果たすように配慮するのである。

再活発化の見通しが全く立たず、たとえ何かを行なったとしても失望は火を見るより明らかなだというような極端な例について考えてみよう。これでも何かしなければならぬ。何かを始めなければならぬのである。ホームテ

ィーチングはその荷を軽くしてくれる。もしも活発な長老一人一人が、ホームティーチャーとして一対一で、または家族対家族で他のひとりの長老とその家族に対する責任を果たすならば、そして各長老が誠実に、熱意を持って義務を遂行するならば、再活発化のために今までの2倍の長老を使うことができるようになるまで、何ヵ月も要しないであろう。これは容易ではない。しかしできないことはない。可能なのである。

ホームティーチャーには権威がある。彼らの召しは正式な召しである。監督、定員会会長、そして主によって召されるからである。ホームティーチャーは担当家族のもとをしばしば訪ねなければならない。そしてそこで家族のために教義と聖約第20章に挙げられている事柄を行なう。ホームティーチャーと

その家族は不活発な家族をフェロシップする。その際、社交やレクリエーション活動が役立つであろう、中でも家庭の夕べから進めていく方法は最適である。月曜以外の日に家庭の夕べを開き、不活発会員を招待する。その際家族全員が友だちになり、福音の教えを述べることを忘れてはならない。ホームティーチャーは担当の家族を、定員会やそれに伴う教育や活動の機会に招待するとよい。

すべての定員会会長は、活発不活発の別なく、できるようになった段階で仕事会や定員会活動に参画するように求められて然るべきである。奉仕は救いに欠かせないものである。

神殿に参入し、祝福にあずかる機会をもつよう家族に勧めるためのプログラムを催してもよいという承認が、大管長会より与えられている。伝道その



他の責任のために、特別なセミナーを開いてもよい。また、すべての教会員は、教会の責任をひとつは受けるべきである。さらに、会員は病人に癒しの儀式を施す方法を知っておく必要がある。そうするときに、定員会のフェローシップ活動は、限りなく効果を現わすようになるのである。

御存知のように、活発化プログラムは次の9つの方法にまとめることができる。(1)各個人を知る、(2)ホームティーチャーを召す、(3)個人的な関係を築く、(4)家族を通してフェローシップする、(5)定員会の社交活動を催す、(6)責任を与える、(7)福音に基づく真理を教える、(8)進歩状況を検討する、(9)個人面接を行なう。



定員会の行なえる最も顕著でかつ重要な事柄のひとつは、その会員に救いの教義を教えることである。「信仰は聞くことによる」と、パウロは語っている。その意味は、人は正当な権能を有する者から、聖霊の力に助けられて福音の真理を聞くときにのみ、その心に信仰を生じるということである。(ローマ10:14、15、17参照)

長老定員会是一种の予言者の塾でなければならぬ。そこにおいてすべての長老と長老見込み会員は、この世において平和を得、来たるべき世において永遠の生命を受けるために家族と共に何をしなければならないかを学ぶのである。

私たちは、四大標準聖典をそのまま神権者の学習教材として用いている。すべての長老と長老見込み会員は、聖典に記されているあらゆる事項をよく読み、深く思いめぐらし、そのことについて祈るべきである。私たちは、知識の源から直接に学ばなければならない。

しかし、学習資料とともにレッスンの主題についての参照聖句を挙げたテキストも発行されている。この新しい方法により次のことが行なわれる。(1)指定された標準聖典を完全に初めから終りまで読む、(2)標準聖典からの引用聖句を参照して、(教義と義務の両方のレッスンで取り上げられた)主題ごとに研究し学ぶ。この定員会の新しい学習方法では、クラスに聖典を持参することは不可欠である。否、最も大切なことである。これはキンボール大管長が特に個人的に要請している点でもある。十二使徒会地区代表のディーン・ラーセン兄弟から、大祭司グループリーダーのあるレッスン教師の話聞いたことがある。その教師は、クラスでこう語ったそうである。「今朝のレ

ッソンの予習をし、標準聖典を持ってきた方はいますか。」返答は全くなかった。そこで彼は言った。「こんなことではレッスンをするわけにはいきません。今日のレッスンは中止にします。」その結果、会員は各自聖典を持参するようになったとのことである。週一回の短いレッスンは、学習という大海の中のわずか一滴にしかすぎない。しかし新しいレッスンのテキストは、聖典の個人学習を促し、同時に家族そろって学習できるようその機会を提供するものとして企画されているのである。

日曜学校には、改宗と活発化の援助を与えるクラスが特別に設けられている。それは、福音の基礎クラスである。このクラスでは、12回を周期として基本的な主題に基づくレッスンを扱っている。従って、このコースを終えた人は、福音の教義クラスに入る。またホームティーチャーは、担当家族が何のレッスンを学んでいるかをいつも知っておき、ホームティーチングの定期訪問ではそれと同じものについて考える。なお、福音の基礎クラスのレッスンを受けるよう推められているのは、求道者ならびに新しい改宗者、長老見込み会員、活発でない長老である。

私たちが勧め、促したいことがもうひとつある。しかもこれはしばしば見過ごしにされていることである。それは、すべてのワード部に聖歌隊を置くという教会の方針である。歌の上手な長老と長老見込み会員が全員この聖歌隊で歌うようにできれば、非常に素晴らしい。また、ワード部あるいはステーク部の集会で特別に時間を取って、長老のコーラスを発表できるようにしてもよい。ステーク部長は、年に一度程度、ステーク部大会で神権者のコーラスを発表するとよい。しかしもちろ

ん、ワード部聖歌隊が教会音楽プログラムで最も重要な役割を演じることは言うまでもない。シオンの歌は心を新たにする力を持っている。そして主が言っておられるように、私たちが歌うとき、主はそれを喜びとされるのである。「すべて心の歌は、われの喜びなり。然り、義しき者の歌はわれに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん。」（教義と聖約25：12）

改宗は必ず、効果的な伝道活動に伴ってあるものである。しかし、18歳で長老に聖任され、専任宣教師としての奉仕を控えている兄弟たちには、特別な注意を払う必要がある。彼らはこれまで、何年もの間監督から援助と励ましを受けてきた。従って定員会会長は一步踏み込んで、彼らがふさわしく、資格を保持して、召しの日を待てるよう、あらゆる手を尽くさなければならない。長老は宣教師となるように求められている。主はもっと大勢の宣教師を欲しておられる。従って教会のすべての若人は、伝道に従事すべきである。宣教師としての奉仕は、いかなるものにも優って若人に祝福をもたらすものである。それゆえ長老定員会は、すべての若人を「主の用向を有てる者」（教義と聖約64：29）にし、主の福音を宣べ伝え、主のメッセージを他の子らに宣言することに最大の努力を傾ける教会の組織とならなければならない。

長老定員会会長は伝道に関してどんな義務を負っているのだろうか。すべての若い長老を伝道の召しに備えさせるために、長老定員会会長は何をすべきだろうか。まず、道徳上のふさわしさを保てるように、特にそれに関連して福音を教えることができる。また、伝道のための預金口座を持ち、モルモン経を読み、証を強め、伝道のレッス

ンを勉強し（教会に活発でない兄弟の家庭でそれを実際に教える機会を持つことができる）、求道者を見つけ、伝道活動の精神を感じ取るようたえず励ますこともできる。長老定員会会長は、これらを通して導き、励ますことができるのである。

先ごろ、「メルケゼデク神権手引き」の改訂版が出版された。見ていただけたらおわかりになると思うが新版は形式が全く改まり、従来のものと違って原則が多く 方法論は少なくなっている。神権指導者は、これまでになく正しい原則を学び、取るべき方法を間違いないく選択する必要に迫られることだろう。定員会の諸事を正しく果たすために、かつてなく豊かな靈感が現在必要とされているのである。

しかし、すべてこれらの事柄には必ず報いが伴う。

目をあげて畑を見なさい。はやく色づいて刈入れを待っている。

刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。（ヨハネ4：35、36）

見よ、畑は早白くして刈り入れを待てり。故に刈り入れんと欲する者は、何れも勢力をつくして鎌を入れ、日の尽きぎる中に刈り取りて、神の王国に於ける永遠の救いをその身と霊とのためにたくわうべし。（教義と聖約6：3）

さて見よ、われ今汝に告ぐ、すなわち汝にとりて最も価値あることは、汝今の代の人々に悔改めを宣べて人々をわれに導き、以て彼らと共に父の御国に休まんことなり。（教義と聖約15：6）

ではここで話を最初に戻そう。「兄

弟たち、あなた方は長老という職をどう心得ておられるだろうか。」ただの長老と言えるのだろうか。この世で使徒や予言者が所有している職はこの職だけであり、彼らが不死不滅のうちに出来て、昇栄に入るときに持つのはこの職のみである。また、この世において平和を得、来たるべき世において栄光の冠を受ける門戸を開くのはこの職だけなのである。

ただの長老と言えるだろうか。この世にあっても永遠にわたっても、ただの長老だろうか。「ヨハネの言う二十四人の長老によりて何を理解すべきか」啓示された答えはこうである。「ヨハネの見たるこれらの長老たちは、先に忠実に導きと教えを施して死にたる者なり」（教義と聖約77：5）ではここで、この世にいる間忠実で、後の王国において昇栄した長老たちについて、ヨハネが記した言葉を見てみよう。「見よ、開いた門が天にあった。……すると、たちまち、わたしは御霊に感じた。見よ、御座が天に設けられており、その御座にいますかたがあった。……また、御座のまわりには二十四の座があって、二十四人の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶって、それらの座についていた。」（黙示4：1、2、4）

ただの長老と言えるだろうか。彼らはその頭に金の冠をかぶっていた。モーセは次のように言っている。「主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ」と。（民数11：29）私たちがこのように言うことはよいことである。

「主の民の中の長老がみな忠実で、神の羊の群れを牧し、監督し、群れの模範となり、彼らの仕える神の誉れと栄光になるとは、願わしいことだ」と。

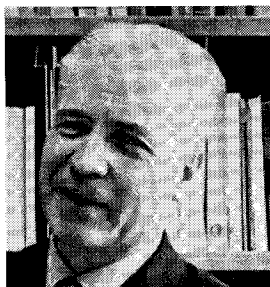
主イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

? 質疑応答

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

「自分に証があるかどうかは、
どうしてわかりますか」

G・ホーマー・ダラム
ユタ州高等教育理事



意識のある人間ならば、だれでもいろいろな証を持っています。火は熱い、氷は冷たい、親切な人も不親切な人もいるなどと。証とは、何かの事実を確立させる確信です。

イエス・キリストの福音が真実だということの証も、基本的には、自然の法則や人の行動について知ることと同じやり方で得られます。つまり、望みと努力と経験と勉強と、それに研究や内省や実行や試みによってです。何かを学ぶときには、目的をもって知的に努力することが役立つものです。イエスは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、……教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ 7：17）と教えられましたし、ヤコブも「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。……」（ヤコブ 1：5）と言っています。

予言者ジョセフ・スミスが回復したキリストの福音が真実なこと、神は生きておられ、私たちの祈りを聞いて答えて下さること、イエス・キリストが世の救い主であることそして権威ある神権の系統を通じてこの教会を導いておられること、求める人には神様の導きがあることなど、証はいろいろな方法で、またさまざまな経験から得られます。一般に、そのような神聖な宣言をする上での能力や自信や気持は、(1)望み (2)研究 (3)実行 (4)祈り から生まれます。研究は知識の扉を開いてくれます。主のみ心を「行なう」には、まずそのみこころを知らなくてはなりません。

実行、すなわち得た知識を実際に使って応用することは知識を試す実験室のようなものです。研究と実行と、それに祈りを加えれば、目的のある知的な努力ができますし、聖霊の確認も得られます。

自分に証があるかどうかは、どうしてわかるのでしょうか。

一番の方法は、自分の奥底にある感情を正直に表現してみることです。疑いをことさら拡大しようとせず、自分の望みとすることを表現するのです。表現は実行のひとつ形です。親に対して、愛する人に対して、あるいは友人や、監督のような信頼する指導者、また教師に対して、自分を表現してみてください。まずそのようにして確信を述べようとすれば、前には知らなかったことがひとりでわかってくることに気づくでしょう。モロナイ 10：4—6 と教義と聖約 9：7—9 にある約束を見落とさないようにしましょう。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る。善いものはみな正しくて真実であるから、善いものは必ずキリストを否定しない。かえってみなキリストがましますことを認めるのである。」

「見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願いし時はこれを与えらるるならんと思えり。されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。故にわが与うるにあらざれば、聖きことを汝録すを得ず。」

誠心誠意で勉強し、実践し、祈ったなら、自分の気持の快不快を知るとまったく同じように、証があるかどうかができることでしょう。モロナイは「……聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る」（10：5）と書いています。

ブリガム・ヤング大管長はこのように言いました。「さて、私の友らよ……あなた方はいかにして物事を知るのだろうか。目に惑わされることがあるだろうか。確かに、音は聞くがその意味や音の出所が判然としないこともあるだろう。触感に惑わされることがあるだろうか。あるに違

いない。神経組織があらゆる物を見分けられるとは限らない。では何がそれをするのだろうか。主イエス・キリストの啓示、真理のみたまがあらゆるものを察知して、それを所有するすべての人に真理と誤り、光と闇、神のものとそうでないものとを悟らせるのである。これこそ、私たちに神の御子の福音や神のみこころやいかにして救われるかを理解せしめる唯一のものである。真理のみたまに従いなさい。それはあなたがたを神へ、光の源へと導き、そこに門は開かれ、心は照らされてあなたがたは物事をあるがままに見、知り、理解するのである。」(「説教集」第13巻〔英文〕P. 336 ブリガム・ヤングの説教より)

最後に言いたいのですが、私たちは電撃のような何か異常な示しを期待すべきではありません。証というのはたいの場合、静かに成長するものなのです。望み、養うことによって次第に花開くのです。そしてその成長の様子は自分にもわかります。証が弱くならないように守るのは自分の責任です。証をないがしろにしたり、望みを捨てて別のものを大事にしたり、またただ放っておくだけでも、証はしばんでゆきます。証を捨ててほかのものを求めたなら、いつか福音の真実がわからなくなるでしょう。福音の知識もいかにげんになります。なぜならあなた自身が福音を拒んで遠ざかっているからです。グマスコへ行く途中のタルソのサウロのように、神様から直接に示しを受ける人はまれです。しかし、私たちは強い確信を持っている人たちからいつでも助けが得られます。でもそうは言っても、結局のところ、最後に決めるのは自分自身なのです。そのときはためらうことなくはっきりと自分の得た知識を確言できるでしょう。研究と実行と祈りを続ければ、教義と聖約50：24の聖句の意味を悟るに違いありません。「神によるものは光明なり。その光明を受けて神に従うこといよいよ久しき者は、その受くる光明はいよいよ明らかなり。その光明いよいよ明かとなりてついに完き昼となるべし。」

「神権の昇進はどのようにして

行なわれるのですか。」

J・アンダーソン

イースト ミルククリークステーク部

この質問は、簡単ですがとても大切なことだと思います。その人がふさわしければ、年をとるにつれてひとつの職から次の職へ、長老から七十人、そして大祭司に昇進する、と答える人が多いことでしょう。集会をあずかる人が、だれかをメルケゼデク神権の別の職に聖任することについて教会員の支持を求めるとき、「昇進する」という言葉を確認に使います。そこで、面接をして承認されてから、権能

を持っている人が、それよりも高い神権の職、と多くの人が考えているのですが、別の職に聖任するのです。

しかし実際、神権の異なる職を受けることは、ある職からもっと重要な職にあがるといった意味の昇進ではないのです。新しい別の責任を伴う新たな神権の聖任の召しを受けると言った方がもっと適切だと思います。主にとってみれば、神権のどの職も重要さにおいては皆同じです。どんな職にあるかよりも、自分の召しをどのように遂行するかがはるかに大切なのです。

ジョセフ・F・スミス大管長はそのことについて次のように言っています。

「職務についたから神権に力が加わるのではない。当教会におけるすべての職務は、神権から力、徳、権能を受けているのである。もし兄弟たちがこの原則を完全に把握するならば、教会における統治機能に関する誤解が、今よりもはるかに少なくなるだろう。今日、大祭司の方が七十人より偉大であるか、七十人の方が大祭司より偉大であるかとかいう問題が起こっている。どちらが偉大なわけでも、小さいわけでもないとは私は申し上げる。これらの召しは、異なった方向を持っている。しかし、両方とも同じ神権に由来している。メルケゼデク神権を持った七十人は、もし必要であればの話が大祭司を聖任することができる。またもし大祭司が七十人を聖任する必要があるれば、それもできる。なぜだろうか。それは、両方ともメルケゼデク神権を持っているからである。さらに、次のような必要性が生じると予期しているわけではないが、もし必要なら、地上に長老しかメルケゼデク神権を持つ者がいない場合、——その長老は、神のみたまの靈感と、全能者の指示によって、イエス・キリストの教会を完全に組織することができる。この長老はそうしなければならないのである。なぜならメルケゼデク神権を所有しているからである。しかし神の家は秩序の家である。他の役員が教会の中にいれば、私たちは、神権の秩序に従わなければならない、また、予言者ジョセフ・スミスとその後継者を通して教会の中に定められた秩序に厳密に従って、儀式や聖任を行なわなければならない。」(「福音の教義」第1巻P. 184)

「他の役員が教会の中にいれば」というのは、神権の各職にはそれぞれに特有の責任があることを意味しています。ですから、この職はあの職よりも立派だという意味での昇進ではないのです。福音の知識が増すにつれて教えに教えを加えられ、また神権の新しい職に伴って受ける責任を全力を尽くして遂行するときに、霊的な力を与えられる、それだけのことなのです。どの職も、メルケゼデク神権そのものに付随しているのですから。(教義と聖約84：29, 30)

南アメリカ 地域総大会開かる!!

ラリー・ヒラー

先頃南米で開催された地域総大会についてその概要を述べるとすれば、次のように要約されよう。大会は2月28日から3月2日までの3日間サンパウロにブラジルの聖徒を集めて、また3月7日から9日までの3日間はアルゼンチン、チリ、パラグアイ、ウルグアイの聖徒が参加して、ブエノスアイレスで開かれた。

プログラムの内容は共に同じであった。金曜の夜は会員によるローカル色豊かな歌と舞踊。一般大会は土曜、日曜の2日間にわたって開かれ、その間に土曜の夜には両親と若人のために、また日曜の朝には神権指導者のために特別集会が催された。

キンボール大管長、タナー副管長と共に出席した教会幹部は、十二使徒評議員会からマーク・E・ピーターセン、デルバート・L・ステイプレー、L・トム・ペリーの3名、十二使徒評議員

会補助からはエルレイ・L・クリスチャンセン、フランクリン・D・リチャーズ、ジェームズ・E・ファウスト(ブラジルのみ)、J・トーマス・ファイアンズの4名、七十人最高評議員会からA・セオドア・タトル、ハートマン・レクター・ジュニア、レックス・D・ビネガーの3名であった。

以上がこの地域総大会の基本となった事柄である。しかし、その色彩、雰囲気、感動の様子はどのようなものだったのだろうか。参加した人々は一体何に胸を強く打たれたのだろうか。

インタビューに応じた教会員の感動の言葉は次の3点に集約された。すなわち「予言者と会い、その話を聞いたことが最高でした」「神殿建設のニュースです」そして「聖歌隊のコーラスが非常に印象的でした」この3つである。

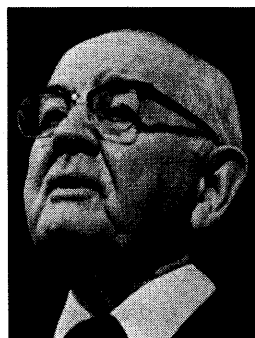
数ヵ月もの間この大会を待ち焦がれ

ていた人々。その心を常に捉えて離さないものがあつた。それは、主の予言者が大会に出席されるということだった。皆が大会に出席できるように働き、犠牲を払い、互いに助け合ったのも、そのためである。聖歌隊の人々はリハーサルのために多くの時間を費やしたばかりでなく、何回となく行なわれた合同リハーサルには、距離をものともせず集まった。それは金曜の夜の文化活動に出演した人々についても同じであった。長い距離を旅し、練習に練習を重ねて、発表の完成に向けて力を注いだのである。予言者をはじめとする教会幹部を前にして、彼らは自らの最善のものを披露したいと思ったのであろう。

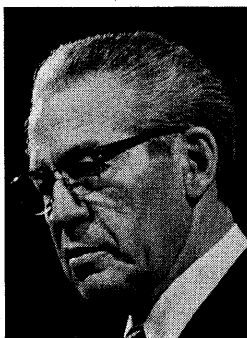
そして幹部が到着し、大会が始まったとき、聖徒たちはあえて予想もしてなかったような素晴らしい祝福を受けた。キンボール大管長がサンパウロの大会における開会の挨拶の中で、祈りの前に次のように発表したのである。

「私は今ここで、皆様方にとって、また全世界の人々にとって喜ばしい発表をしたいと思います。私たちは皆様方の現在の状況を分析し、完全な協力体制が得られると判断したため、南米の地に主の第17番目の神殿を建設します。場所はブラジルのサンパウロを予定しています。」

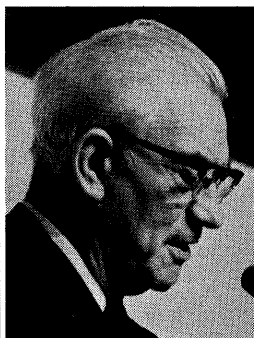
現在、神殿から遠く離れた地域に住んでいる人々にとって、この発表には胸を強く打たれるものがあつたに違い



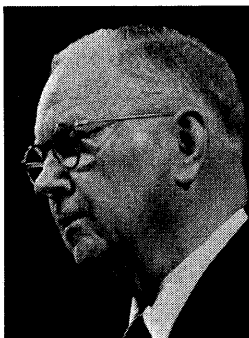
スベンサー・
W・キンボール



N・エルドン・タナー



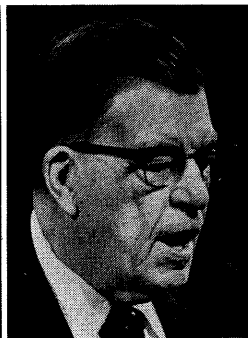
マーク・
E・ピーターセン



デルバート・
L・ステイプレー



L・トム・ペリー



エルレイ・
L・クリスチャンセン

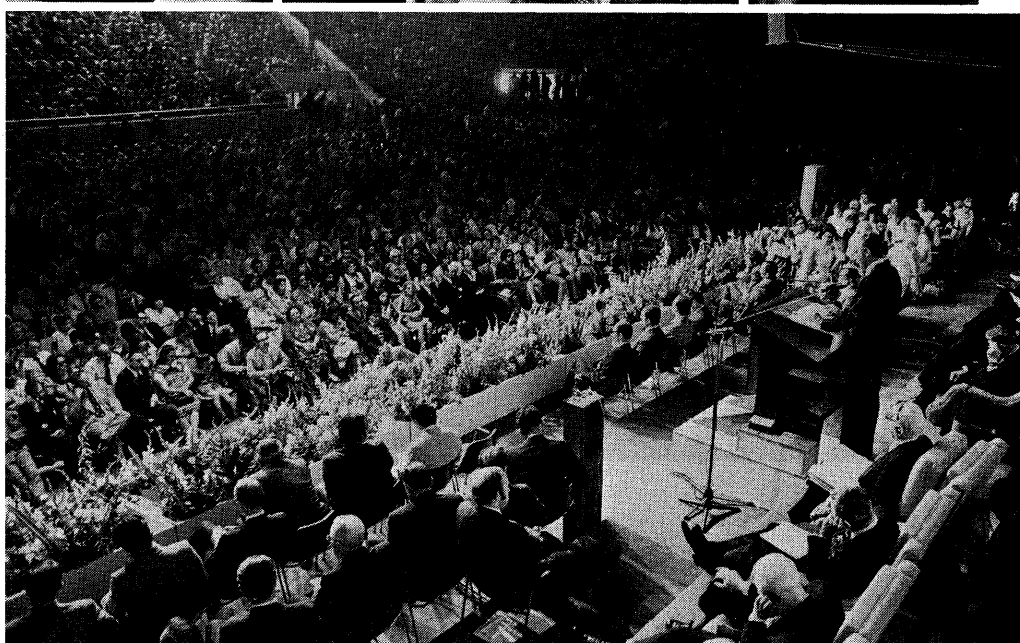
ない。ウルグアイから来たというある
幸せそうな家族はこう語ってくれた。

「アメリカの神殿に行く費用を貯め
るには、最低10年はかかる計算でした。」
しかし今まさに神殿が南米の地に建設
されようとしており、彼らもほんの数
年の内にその祝福に浴することができ
るのである。ある人々は神殿について
自分の気持ちをなかなか表現できないで
いた。まるでそのニュースを耳にした
ときの驚きがまだ続いているかのよう
に、ただ「素晴らしい」のひと言だけ
であった。しかし涙にぬれた目は、彼
らの心に言葉では言い表わせない思い
があふれていることを物語っていた。

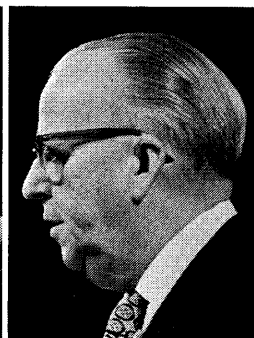
大会は終始、感動と一致の精神に充
ち満ちていた。たとえば金曜の夜の文
化活動は、数百キロも離れた地区や国
から集った兄弟姉妹の心に大いなる一
致の精神をうえつけたと言える。各グ
ループ共、互いのユニークなタレント
や文化を目のあたりにして、さらに理
解を深め合ったに違いない。

聖歌隊や文化活動のリハーサルには
思わぬおまけがついた。若人が他の支
部の人々と知合いになることにより恋
が芽生え、中には婚約した人たちもい
るという。

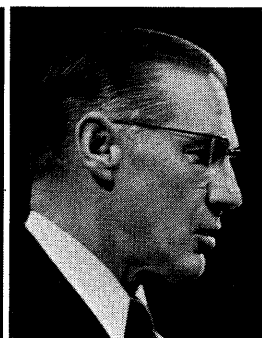
南米の教会員の大半を占めるのが若
人だが、彼らが大会の雰囲気を持ち上
げる上で果たした役割は大きい。彼ら
は文化活動での発表に加えて、一般大
会でも美しいコーラスを披露してくれ
た。たとえばサンパウロの大会では、



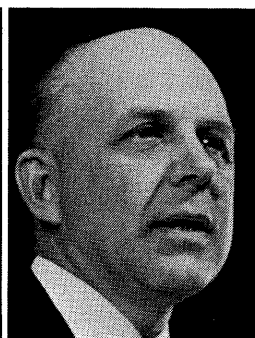
J・トーマス・
ファイアンズ



フランクリン・
D・リチャーズ



ジェームズ・
E・ファウスト



A・セオドア・タトル



ハートマン・
レクター・ジュニア

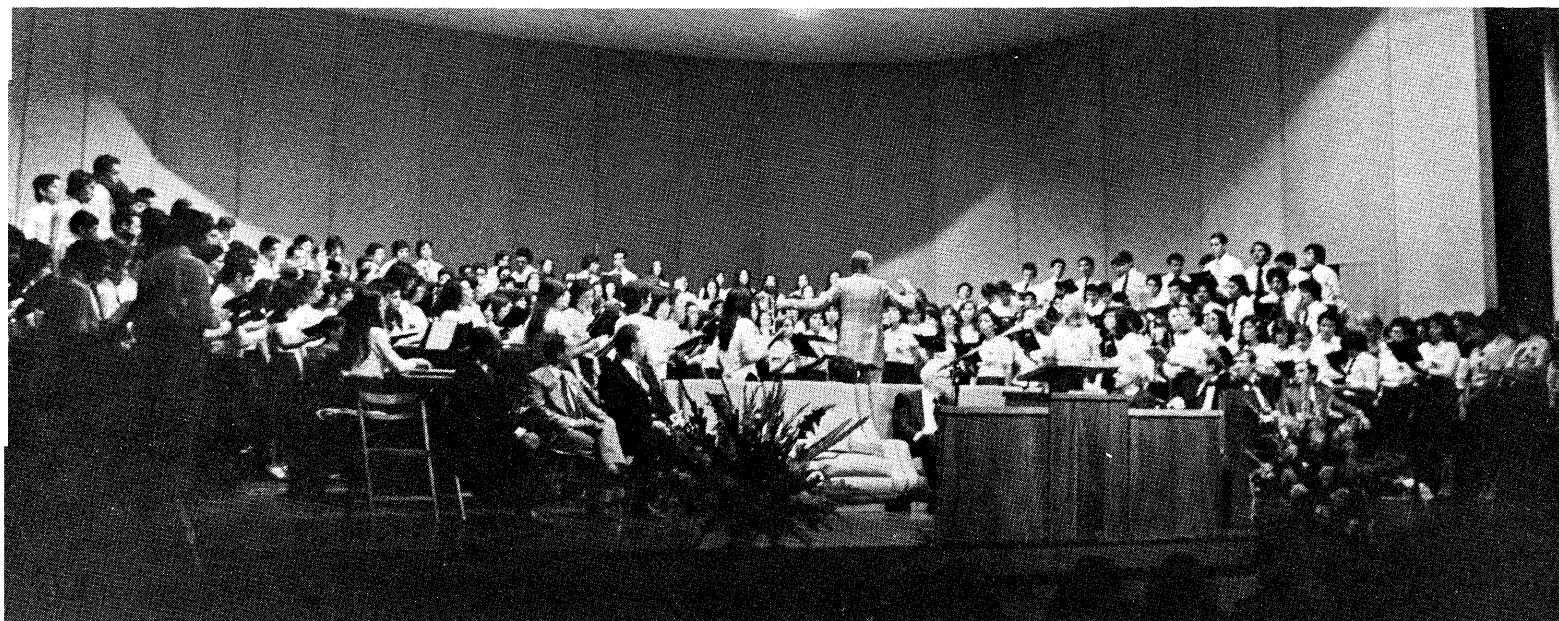


レックス・D・ピネガー

日曜の午前の部で、セミナーとインスティテュートに集う1,200名以上の若人が共に歌った。パステルカラーのシャツとドレスを身につけた彼らは会場の中央の部分を一杯に埋めていた。そして午前の部の大会を終えてもなおその席を離れようとはせず、再び合唱を始めたのであった。彼らは壇上の教会幹部を見つめながら立ち尽くし、感

れた団体はなかったと語っている。会場の外で何時間も会の終了を待っていたある新聞者のおかかえ運転手がいた。彼は毎日毎日大会に集う聖徒たちの姿を見守っていたが、最後の日になって彼の好奇心は頂点に達した。「この人たちはどこから来ているのだろう。こんなに混雑しているのに押し合うこともなければ言い争いもしない。皆の心

の試算によると、ある会員にとって大会への参加費用は月収の3倍にも達するという。残業やアルバイトに、また基金獲得活動に汗を流した兄弟姉妹が数多くいるのだ。ある人々にとっては会場に来るのさえも容易ではなかった。30時間以上バスに揺られるのがごくあたり前なのである。中にはチリから65時間もかかってブエノスアイレスに着



激を込めて歌い続けた。歌う者の目にも、壇上の幹部の目にも涙があふれていた。

大会に出席した非教会員の心にとりわけ強い印象を残したのが、このコーラスである。たとえばブラジルでは、大会の様子が数百万の視聴者数を誇る最も人気のあるテレビニュース番組で紹介されたが、カメラマンや記者たちにとってこのコーラスは驚異であった。「このような聖歌隊をどこで養成したのですか」彼らはそう尋ねた。もちろん、皆がサンパウロに集まるまで、聖歌隊などなかったのである。

また他の人々は大会に集った人々の態度に強い感銘を受けた。会場であるサンパウロのアンヘムビコンベンションセンターの支配人は、今までセンターを利用した団体の中で、これほど整然と、しかも会場を汚さずに使ってく

が思いやりで満ちているのはどういうわけだろう」

サンパウロでは大会の模様を建物の各所に有線でテレビ中継したため、技師たちが会場で働いていた。彼らは初めの頃は祈りのときにも会話を交わしていたが、日曜の午後の大会では、調整室に入ってきたひとりの技師が話を始めると、主任技師が振り返ってこう言った。「しっ！お祈りだよ」彼は末日聖徒ではない。

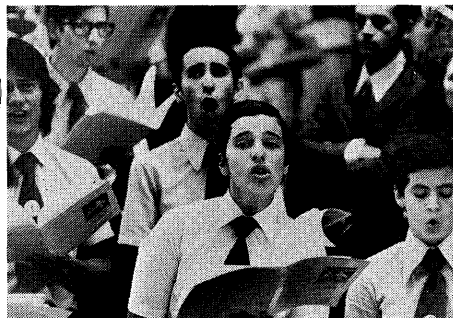
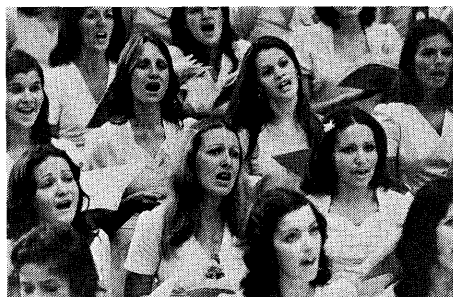
ブエノスアイレスの聖徒たちも、非教会員の人々に同じような印象をうえつけた。会場の支配人や整理にあたった警官も、教会員の整然とした振舞いに目を見張っていた。

しかし、大会に参加するために一人一人がどれだけの努力を払ったかを知れば、非教会員の驚きはさらに大きなものとなるに違いない。ある伝道部長

いた兄弟もいた。

しかしそうした人々が皆、犠牲ということについて尋ねると「とんでもない」とでも言いたげに肩をすくめる。実におもしろいことだ。「もちろん大勢で来るのは大変でした。でも犠牲だとは思っていません」私はここに大会の真髄を見る思いがする。犠牲ではなかったのだ。なぜなら、その耳で主の僕の声聞くことができたのだから。予言者をはじめ教会幹部が列席する会で靈感あふれる勧告に耳を傾けた聖徒たち。彼らの願いはこうして叶えられたのである。

キンボール大管長は、ヨシュアがイスラエルの人々に与えたチャレンジを取り上げた。「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。」（ヨシュア24：15）また神殿建設について再度触れ、そのために犠牲を捧げるよう聖徒

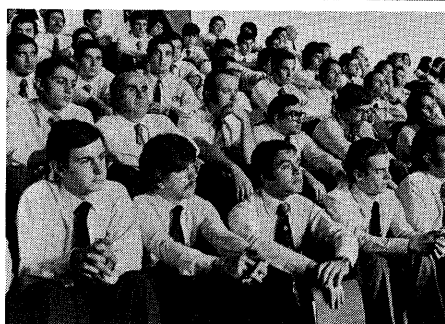


たちに励ましを与えている。「この神殿を新たな犠牲として受けるよう希望します。讃美歌にも『天の恵みのいけにえ』(No.144)とあるからです。皆様方にもたらされる祝福の中で、父親と母親が今も永遠においても夫婦として結び固められ、また子供たちが同じように両親と結び固められること、これほど大いなるものではありません。これにより家族は死後もその絆を絶たれることなく、共に義と完成に向かって成長し、やがて神に似た者となるのです。」

マーク・E・ピーターセン長老の話は「わたしのくびきを負いなさい」(マタイ11:29)という戒めに関してであった。「主のくびきを負うことは、人生において最も重大かつ神聖なことです。主のくびきを負う私たちは、まず真摯な態度を要求されます。また主に対して正直でなければなりません。世にあっても世の習慣や罪に負けてはならないのです。」

ブエノスアイレスの神権指導者会に集まった人々は、神権指導者としての能力をどのように伸ばすかということについて、フランクリン・D・リチャーズ長老の話聞いた。彼は時間を効果的に用いることを説いている。「生活自体や仕事のパターンを簡素化することが必要です。そうするためには、一度に多くのことをせず優先順位の先のものから片づけていくことです。」

同じ会でデルバート・L・ステイプラー長老は、神権の本質に関してこう語った。「神権の権威と力とは意味が異なります……たとえ神権を授かったとしても、教会に積極的に参加しなかったり、また不従順な態度で戒めを破るような生活を続けていると、神権の力は得られなくなるでしょう。神権はたとえ私たちの霊が眠った状態でも私たちの中に存在しています。しかし力を取り去られますから、奇跡は起こりません。不活発な人々は自ら利益を拒んでいるばかりでなく、もし自分が忠実であれば当然高められる他の人の祝福まで拒んでいるのです。」



両親と若人の集いに出席した人々にも特別な勧告が与えられた。キンボール大管長は家族の一致を崩そうとする力がいろいろなところで働いていることを警告し、また現代の若人を取り巻く誘惑についても触れた。「解決の道は、戒めを守り、家庭における義務を怠らずに行なうことにあります。主のプログラムは、父親を家族の長としての正しい位置に、また母親を社交生活や職場から家庭に戻すこと、また子供を戯れの間から家族のもとに戻すことにあるのです。最高の活動であるホームティーチング、家庭の夕べ、これらは塗るだけで傷を治す薬のようなものです。」

またキンボール大管長は、過去の文明の崩壊の有様について触れ、次のように話を続けた。「もしもバビロンの父親たちが、妻の協力を得て神の指導

と勧告のもとに子供をしつけ、教育していたならば、その偉大な都市が砂に埋もれ、墮落した人々が地中に姿を消し、泉が渇き、神殿が揺らぐようなことは起きたでしょうか。飲めや歌えの大騒ぎをしたために危険を知らずに眠ってしまうようなことがあったでしょうか。シュロや柳が枯れ、かんばつで土地が干上がって荒廃してしまうようなことがあったでしょうか。まだバビロンがこのように非難や物笑いの種になることがあったでしょうか。」

サンパウロの大会で、レックス・D・ピネガー長老は両親と祈りについて語った。「私は両親の信仰あふれる祈りにどんなに感謝しているかわかりません。その祈りが今まで何度私を救ってきたかわかりません。しかし言えることは、子供は両親の祈りを通してもたらされる祝福を必要としているとい

うことです。

子供たちは両親のために、またお互いのために、そして教会の指導者のために祈る必要があります。また義なる望みを持つ国の指導者を祝福したもうように、主に祈らなければなりません。子供たちは感謝の祈りを知る必要があります。またそれぞれが直面するチャレンジを克服できるように、強さと知恵を求めて祈らなければなりません。さらに、祈るだけでなく、その祈りにふさわしく生活し、求める祝福を受ける資格が得られるようにしなければならぬのです。」

大会に集った若人は、教会幹部が愛にあふれた平易な言葉で語りかけるのを聞いた。自らを清く純潔に保つこと、両親と神権指導者に従うこと、そして伝道の責任。彼らの心には、これらの幹部の勧告が強く響いたことだろう。

ブエノスアイレスでのキンボール大管長の若人に対する説教は、伝道活動を特に強調したものだ。大管長は、世の人々が真理を知らないがために悩まされる問題をすべてあげ、次のように語った。「この世界のすべての人々に、教会に入るならばもっと幸福になれること、飢え渇くことはないこと、そしてもっと愛を受けて生活できることを話せたらどうでしょう。」

私は南米から5,000名の宣教師が召される日を楽しみにしています。南アメリカには5,000名を越える少年がいます。なぜ彼らは伝道に出ていないのでしょうか。思うに、伝道の大切さを理解していなかったのではないのでしょうか。出るか出ないかただどちらかに決めさえすればよい位にしか考えなかったのでしょうか。

でも、伝道は什分の一を納めるようなものです。もちろん什分の一も、納めるか納めないかは本人の自由ですが、主を愛する人ならだれでも什分の一を納めるようになるはずですよ。」

キンボール大管長は非常に美しい女性と愛し合うようになったある大学生について話した。彼のプロポーズに彼

女はこう答えたそうである。「結婚したいとは思いますが。でもあなたはどこで伝道したのですか。」そして彼が伝道よりもまず学校の勉強の方を先にしなければ、と説明すると、「じゃ、もう少し待った方がいいわね」と彼女は答えた。彼はその後すぐに、オーストラリアへの伝道の一団に加わったとのことである。

キンボール大管長はこう続けた。「若い女性の皆さんは、自分がどれだけの力を持っているか知っていますか。今ここに軍隊が来て、伝道に出るように命令したとしても、あなた方が持っている力には勝てないのです。少年たちのひとりがあなたと恋するようになったら、コントロールするのはあなたです。もちろんどのように話してもかまいません。でもこう言うこともできます。「あなたが伝道から帰るまで待っています。」

こうした説教を聞いた若人はどのような気持ちを抱いただろうか。「宣教師になろうという決心がますます強くなりました。」こう語ってくれたのはかわいらしい17歳の少女である。「弟たちも伝道に出るように力づけてあげるつもりです。」

若人に与えた影響のもうひとつの例として、サンパウロ西部ステーク部のプエルタ部長は次のような話をしてくれた。大会の前に彼は伝道に出ることについてある若い兄弟と面接をした。その兄弟は大学生活を中断して伝道に出ることに疑問を抱いていた。工学部の3年生だった彼は、伝道を終えてから復学できる望みがほとんどないことを知っていたのである。そのため彼は、地域総大会が終わってから返事します。と答えた。しかし最後の会が終わった後で彼はステーク部長を捜し出し、目に涙を浮かべながら「ぜひ伝道に出たいです」と語ったということである。

同じような例は枚挙にいとまがない。ただ言えることは、大会に集った若人の目から、そしてほほえみから、その熱意を感じ取ることができたというこ

とである。「心が清められる思いでした」とある者は語る。またある者は声をふるわせながら、「予言者と握手したんです」と語った。

大会に出席した多くの教会幹部や十二使徒会地区代表にとって、大会は地元の友人たちと旧交をあたため、何年も前にまいた種が実を結ぶさまを見る恰好の機会であった。かなり前に南米で宣教師として活発に働いた人、伝道部長や伝道部の管理者を務めた人たちもいる。出席した聖徒の中で彼らから教えと助言を受け、指導者として召された人も数多くいる。彼らはかつて教会が、そしてそこに集う人々が成長の過程を歩むのを見守っていた。そして今、数千名の献身的な聖徒たちがこのふたつの偉大な大会に集うのを目のあたりにし、また非常に多くの若人の姿を見たのである。それらの若人こそかつて自分たちが教えた兄弟姉妹の子供、そして孫たちなのである。

幹部から個人的に深い感銘を受けた会員も少なくない。ブエノスアイレスの大会でのふたつの出来事を紹介しよう。双方ともキンボール大管長に関連する話である。

両親の集いで、ブエノスアイレス東部ステーク部のミグエル・アビラ第一副ステーク部長は、彼の妻が10年前にひどい病気を患っていたことを話した。何度も検査を受け、手術をしたのだから全く良くならない。当時彼らは結婚して7年経っていたが、まだ子供はいなかった。そして病気は、もう一度手術をすれば子供を産めない体になるところまで進んでいたのである。

ところがある夜、彼は夢を見た。当時の十二使徒のひとりが夢の中で、心配には及ばないと言い、さらにある大切な召しが彼の上に下り、彼と妻は子供を授かると約束したのである。やがてそれから8ヵ月後、ブエノスアイレスステーク部が組織され、当時十二使徒評議員会会員であったキンボール大管長が彼を監督に聖任した。夢に見たのはまさしくキンボール大管長であっ

た。2週間後、アビラ姉妹は健康を回復し、医師は彼女が妊娠したことを告げた。そして彼らに男の子が授けられたのである。

もうひとつの例はこうである。大会であるひとりの婦人が十二使徒会地区代表のアレン・リトスターのもとへ歩み寄り、キンボール大管長と会って話したいのだが、と言ってきた。彼女はキンボール大管長から祝福を受けるまでに10人の子供を亡くしていたのである。かたわらに寄り添っている美しい十代の少女を指して彼女はこう言った。「娘がキンボール大管長にお礼を言いたいと言いますので。」

これまで長い間、南米には何千人もの宣教師が送られ、信仰の種がまかれた。総大会に集った数千名の聖徒たちは、その努力が実を結んだものと言える。そしてこの総大会で、また新たな種がまかれた。これもこれから数年のうちに必ずや実を結ぶであろう。幹部の話に心を動かされた会員は、ひとりで数十名の人々を教会に導くことができる。そして宣教師として働くよう靈感を受けた若人は、数百名の人々の人生を善へと向かわせることができるのである。また、後の世代の指導者を育てることについて主の僕の勧告を聞いた親、そして未来の父親、母親たちは果たしてどれだけの数にのぼっただろうか。

今まで述べてきた事柄は、地域総大会のほんの一面にすぎない。なぜなら本当に大切な出来事は、参加した一人一人の心の中で起きているのだから。しかしそこに集った数千名の若人の輝く顔に、未来は読み取れるのだ。もしそうだとしたら、2月28日から3月2日までサンパウロで、そして3月7日から9日までブエノスアイレスで開催された大会から偉大なことが起きるに違いない。

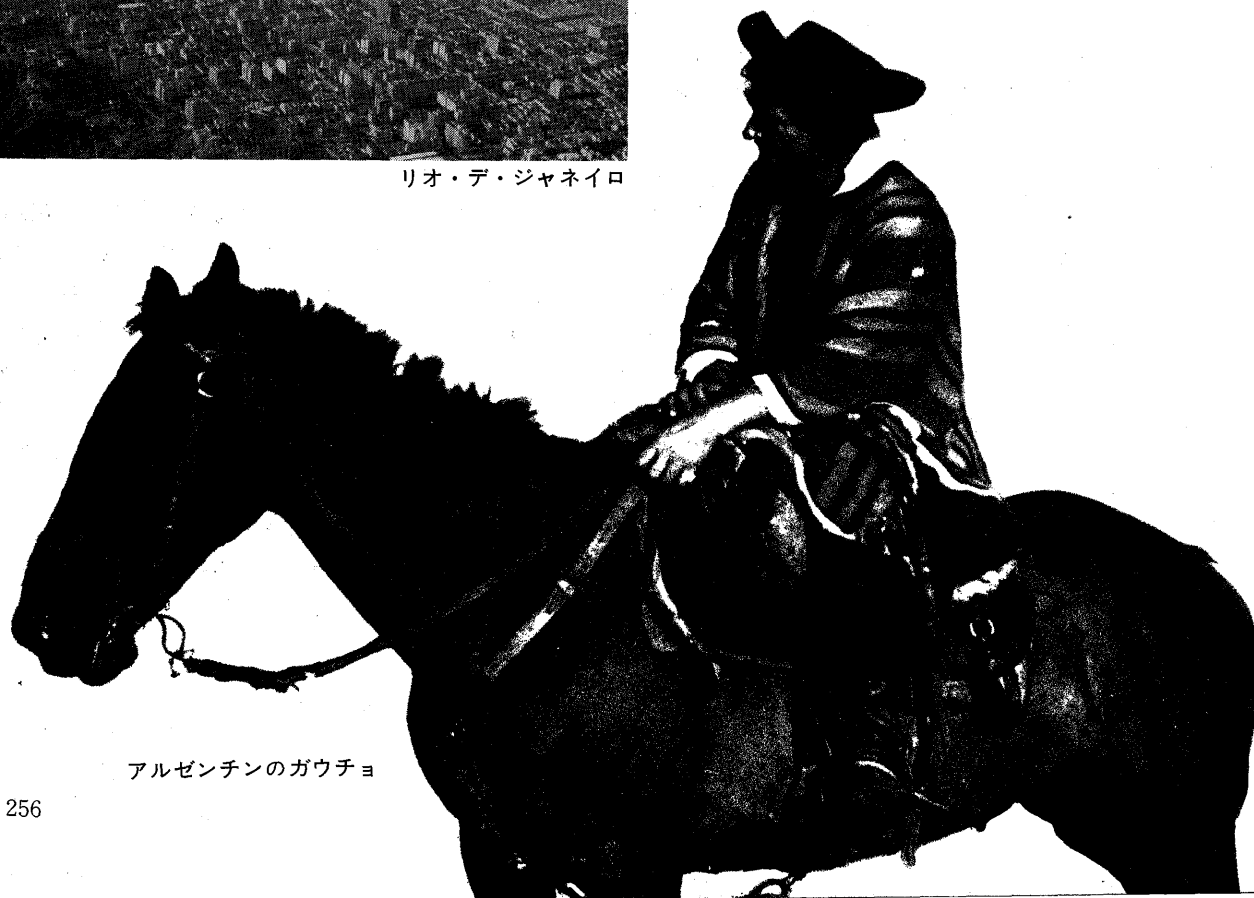
南アメリカ南部 の教会



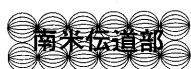
リオ・デ・ジャネイロ



サンパウロ・ルーベンベルタ通りの高速道路



アルゼンチンの gaucho



南米伝道部

パーレー・P・プラットと妻のフィービ・ソーバー、それにルーファス・アレン長老が1851年に南米初の宣教師としてチリのバルパライソに到着したとき、教会の歴史はわずか21年を経たばかりであった。

恒久的に伝道部が設置されたわけではなかったが、教会歴史のそのような初期にこの地で使徒が働いたことに意義がある。プラット長老は南米の人々に対する関心を生涯失わなかった。伝道活動が実質的な第二のスタートを切ったとき、スペイン語を話せるプラット長老の孫息子、レイ・L・プラットが第一陣の宣教師に加わっていた。

この第二の伝道活動が開始されたのは、初めての伝道から75年近く経った1925年のことであった。すでに大管長会から南米にアンドリュー・ジェンソンとトーマス・S・ページが派遣されて、伝道再開の可能性を調査していた。彼らは状況は良好だと報告し、十二使徒評議員会が伝道部開設を満場一致で承認した。

ちょうどそれと同じ頃、ドイツからアルゼンチンのブエノスアイレスへ引越してきた2家族の父親、ウィルヘルム・フリードリッヒとエミル・ホップが宣教師の派遣を要請した。2家族は定期的に集会を開き、数人の友人がバプテスマを望んでいたが、フリードリッヒ兄弟は執事でホップ兄弟は教師のため、バプテスマを施したり支部を導いたり

する権能を持たなかったのである。

そして1925年12月6日、一日千秋の思いで待っていたブエノスアイレスのドイツ人改宗者のもとに、十二使徒のメルビン・J・バラードと七十人最高評議員会のレイ・L・プラットとルロン・S・ウェルズが大管長会の依頼を受けて訪れたのである。12月19日、フリードリッヒ家とホップ家の友人6名がバプテスマを受けた。

その年のクリスマスの朝早く、バラード長老とウェルズ長老とプラット長老は、「2月3日」と呼ばれる公園に集まり、その地を伝道活動に奉献した。バラード長老は奉献の祈りの中でこのように言っている。「そして、おお父よ汝が僕、大管長の祝福と召しの権能により、また私の持つ聖なる使徒職の権能によって、私は鍵をまわし、これら南米諸国に福音伝道の扉を開きます。またこれらの地で福音伝道を妨げるあらゆる勢力を叱責し、退けと命じます。」

伝道事業は成功を収めた。それはバラード長老が、8ヵ月の伝道の終わる数週間前に予言した通りであった。「主のみ業は当分はゆっくりと、ちょうど樫の木がどんぐりからゆっくり育つように発展するであろう。一朝一夕に育って枯れるひまわりのように一日で伸びはしない。しかし大勢の民がこの地で教会に加わるであろう。そして伝道部が幾つにも分かれ、教会最強の地域のひとつとなるであろう。この地のみ業は、今を最小として伸びてゆく。南米伝道部は教会の力となろう」(Sermons and Missionary Service of Mervin Joseph Ballard「メルビン・ジョセフ・バラードの説教と伝道」ブライアント・S・ヒンクレー編 [英文] P. 100)



アルゼンチンの教会

アルゼンチンに本部を置いた南米伝道部は、1935年にアルゼンチン伝道部とブラジル伝道部に分割された。W・アーネスト・ヤング伝道部長が14名の宣教師と255名の教会員の管理を託された。

1938年にフレデリック・S・ウィリアムズ伝道部長が後を継いだときには、20の借家で定期的に集会が開かれ、45名の宣教師がいて、その年には66名のバプテスマがあった。

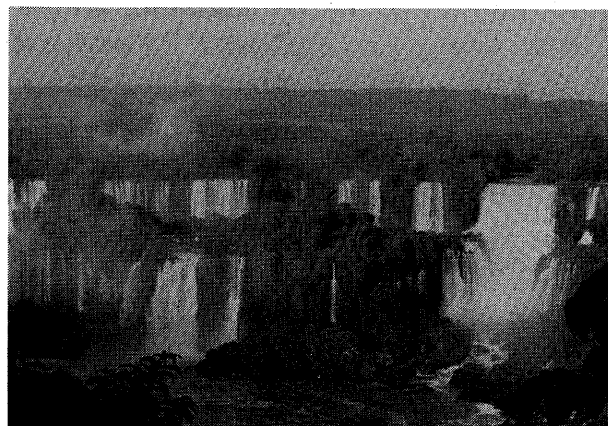
南米に最初の礼拝堂が建てられたのはブエノスアイレス郊外のリンエルスで、1939年4月9日ウィリアムズ伝道部長が献堂した。そのような発展に伴って世間の評判も良くなった。

アルゼンチンの野球とソフトボールの試合で伝道部チームが優勝したのである。

発展は1944年まで続いたが、その年になると、第二次世



ブラジルの教会堂
イグアスの滝



界大戦のために、宣教師は3名を残して全員帰国を余儀なくされた。その後1年以上宣教師は戻らなかったが、再びW・アーネスト・ヤング伝道部長が管理の職に就いた。

戦争が終わると、アルゼンチンに新時代が到来した。1949年、ハロルド・ブラウンが伝道部長に召されると共に彼の指示の下で補助組織の拡充、地元の教会員の支部長への任命、新伝道計画の確立、新しい都市への伝道の開始、宣教師のウルグアイ派遣などが行なわれた。

さらに、教会幹部のアルゼンチン訪問が発展に拍車をかけた。1954年にデビッド・O・マッケイ大管長が、1960年にはジョセフ・フィールディング・スミス大管長とA・セオドア・タトル長老が訪れ、本格的な伝道再開から10年を経た1959年には、教会員数3,500名に増えていた。さらに外交官としてホンジュラス滞在の経験をもつロリン・N・ペースが1948年にアルゼンチン伝道部長となつてからは、なおも発展が続いた。彼は北アルゼンチンに初めて宣教師を送ってツクマンとサンチャゴ・デル・エステロに伝道を開始し、1926年には伝道部が分割された。

その4年後、当時十二使徒であったスペンサー・W・キンボール長老が南半球で初めてスペイン語国にステーク部を組織した。場所はブエノスアイレスで、7つのワード部が所属し、現在は十二使徒会地区代表となっているエンゼル・アブレアが初代ステーク部長となった。

このステーク部が今日では5つになっている。ブエノスアイレス東部、ブエノスアイレス西部、コルドバ、メンドサ、ロザリオの各ステーク部である、さらに4伝道部があり、ふたつはブエノスアイレスに本部を置き、あとはロザリオとコルドバにひとつずつである。アルゼンチンの教会員は2万7千人近くに増加した。



ブラジルへの福音の紹介は、アルゼンチンに福音が紹介されて1年余り後の1927年に、ブラジルへ移住したドイツ人聖徒を捜して、ふたりの長老がアルゼンチンからやってきたことに始まる。長老たちは1ヵ月間滞在し、南ブラジルは「将来、素晴らしい伝道活動が約束される地域」という結論を得た。

1928年には、これもドイツとイギリスから移民した教会員を捜して、アルゼンチンからスツーフ伝道部長と2名の宣教師が到着した。彼らは1万6千人のドイツ語国民の中心地区ジョインビーレにドイツ人聖徒の小拠点を発見し、翌年にはドイツ人のバプテスマがあった。1929年にはブラジルで初めて不動産を購入したが、ジョインビーレのその古い家は、今もクリチバ・ブラジルステーク部ジョインビ

ーレワード部の集会所に使われている。

1935年2月9日に大管長会はブラジルをひとつの伝道部として分割独立させ、ルロン・S・ホーウェルズ伝道部長の管理下に置いたが、執事7名、教師4名、祭司4名、未聖任男子会員29名、21歳以上の女性64名、子供35名、合計143名の教会員と9名の宣教師が伝道部中に散在していた。

長老たちはほぼ10年間、移民してきた人々を対象に公式な国語ではない言語で伝道を行なった。ドイツ人移民にドイツ語のみによる伝道が続き、ようやく1938年になって初めて長老たちにポルトガル語習得の指示が出た。その年、ジョン・アルデン・パワーズ伝道部長が幾つかの小冊子とモルモン経のポルトガル語訳に着手した。ポルトガル語の教会出版物はそれが最初であった。

第二次世界大戦の困難な時期には、アメリカ人長老の人数が減ったために伝道活動の伸びは鈍ったが、その10年後1954年のデビッド・O・マッケイ大管長のブラジル訪問と共に勢いを盛り返した。

マッケイ大管長訪問の2年後、大管長会のヘンリー・D・モイル副管長はリオデジャネイロの宣教師大会で、霊的経験により何千の改宗者が生まれるだろうと予言した。

現在、ブラジルの教会はそうように発展して5万人余りの教会員と4伝道部、9ステーク部を有しているが、伝道活動はまだ始まったばかりである。ブラジル全土に宣教師の行っていない町は数百もある。

ブラジルで礼拝堂が最初に献堂されたのは1959年で、同じ年に南部3州にまたがってブラジル南伝道部が創設された。

その7年後の1966年、ブラジル初のステーク部が組織され、本部がサンパウロに置かれた。現在ではサンパウロ市内だけで4つのステーク部がある。1972年にはリオデジャネイロがステーク部となり、翌年にはカンピナス、サントス、クリチバ、ポルトアレグレの4ステーク部が組織された。ブラジル全土に27の教会堂があり、さらに16の建築が進み、21が建築予定にのぼっている。

ブラジルの聖徒たちは幾多のチャレンジを抱えながらも伝道の精神をつかみ、福音を隣人に紹介することに大きな喜びを見出している。昨年ある伝道部では、わずか3週間で約100人のバプテスマが行なわれた。その75%は家族で、なおうらやましいことには、73パーセントが教会員の紹介で福音を知ったのだという。真理に飢え渴いたブラジルの民は、教会に温かな歓迎を寄せているのである。



チリの伝道は、パーレー・P・プラット長老の一行が上

陸した1851年に始まるが、この来訪の後、彼が「エデンの
ように豊かな」と賞賛したこの土地にアルゼンチンから2
名の宣教師がやって来たのは、95年も経た後であった。

最初にバプテスマが行なわれたのは1956年11月25日で、
そのうちのひとりカルド・ガルシア・シルバ兄弟は当時
を回顧してこう語る。「ちょっと考えてみて下さい。最初
はたったの4人でした。私はこの教会が本当の教会だとわ
かっていました。それは単なる信仰じゃなくて、確信でし
た。でも、知恵の言葉や什分の一という教えがあるので、
教会はこの国では成功するはずがないと思いました。どこ
ろが今、大会には何百人も、ときには何千人も集まります。
教会は毎日大きくなっているんです。」

事実教会員はチリサンチャゴ伝道部の9地方部、43支部
とチリサンチャゴステーク部の87ワード部で2万1千人ほ
どになる、1972年に組織されたステーク部のステーク部セ
ンターに教会堂を8つと教会の学校を5校と教会農場を補
充する計画は、人口の9割が集中している中部と北部の各
地で実施され、さらに6つの教会堂が計画の段階にある。
また、1974年にはふたつのステーク部が誕生した。1974年
12月5日、チリサンチャゴ伝道部からチリビナデルマル
ステーク部ができてホセ・レイトンがステーク部長に召さ
れ、また1974年12月8日に組織されたチリサンチャゴ南部
ステーク部のステーク部長には、エドアルド・アヤラが召

された。

この華々しい発展は、初期教会員の信仰と未来への展望
を実現するものである。初めて宣教師がやって来てから1
年後の1957年に、アルゼンチン伝道部所属の支部として、
5名で教会が組織されたのだった。

チリの伝道は地理と気候の関係でなかなか困難だったが、
それにもかかわらず、やがてビナデルマル、バルパライ
ソ、タルカワノなどチリ中部全域に支部が林立した。

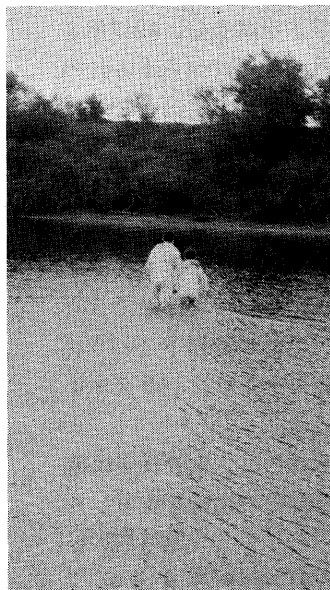
初期の頃の教会員で、チリ人として初めて支部長、地方
部長、副伝道部長などの役職に就いたのが、カルロス・シ
フェンテスである。現在チリサンチャゴステーク部のステ
ーク部長である。彼はこのように述懐している。「求道者に
対する親しさと兄弟愛がよく感じられました。私が教会か
ら最初に学んだのは、自分が神様の子だということでした。
何よりも驚いたのはそのことです。私は根っからの技術屋
で神様よりもグリースやガソリンや鉄と顔をつき合わせて
いたものですから、自分が神権会で教えるようになるう
などとはまったく思いがけないことでした。このような機
会を持つことになるとは、みじんも考えませんでした。生
まれてから一度も……。」

チリは1961年に伝道部として独立したが、12の支部のう
ちチリ人の支部長が管理したのは4支部だけであった。

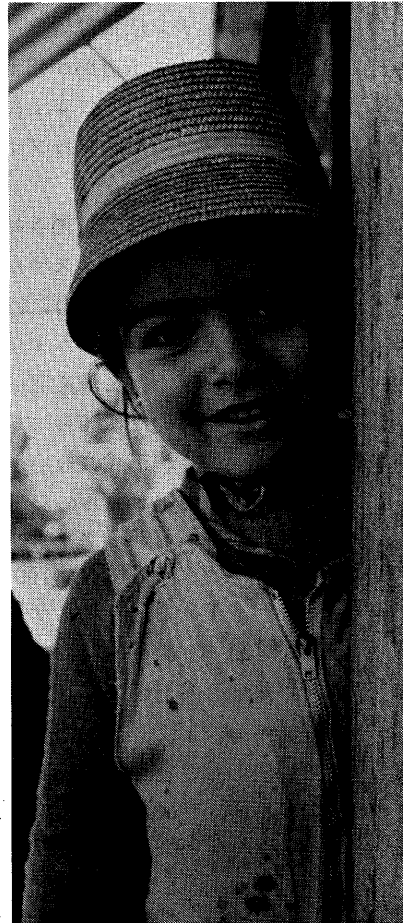
チリでは宣教師育成にも大きな力を注いでいる。シフェ



教会員による会堂建設



川でのバプテスマ



アルゼンチンの
ベナド・トウエルト支部の若い会員

ンテスステーキ部長は、「ほとんど毎週、伝道に出たいという話を聞きます。それも若い人だけでなく、大人の人たちからも……」と語る。

指導者たちは教会の発展の速さを、教会に課せられたひとつの大きなチャレンジとみなし、その最大の解決法は教会員の忠実さであると考えている。

チリサンチャゴ伝道部のロイデン・J・グレイド伝道部長はこのように言う。「今、チリ国民は従来以上に福音の教えを受け入れやすくなっています。自分の家族とか宗教とか、永続して価値ある事柄について考える時間が増えています。将来に対する楽観や希望が国全体の雰囲気になっており、回復されたキリストの福音も希望を与えています。」

パラグアイ・ウルグアイの教会

南米人のように猛烈なスポーツ愛好国民には、スポーツが各地に福音を紹介する手立てとなっているのも当然である。記録にあるウルグアイ初の伝道活動は、1940年、アルゼンチンの宣教師ロルフ・R・ラーソンが教会代表としてウルグアイの首都モンテビデオで開かれた南米バスケットボール選手権大会に出場し、何回も行なわれたインタビューで、モルモンだと自己紹介をしたことである。

その3年後に、フレデリック・S・ウィアリムズが仕事でモンテビデオに転勤した。前アルゼンチン伝道部長の彼らは、アルゼンチン伝道部に支部開設の申請をし、1947年8月、ウルグアイに伝道部が組織された。それから4ヵ月の後には、モンテビデオに4支部ができた。(皮肉なことに最初のバプテスマはウルグアイではなくパラグアイで行なわれた。)

1948年には扶助協会が働き始め、その年の終りには66名の宣教師で54名のバプテスマがあり、モンテビデオでは6つの小支部に発展、他の町にはさらに8つの支部ができた。

1949年、大管長会はウルグアイ伝道部の管轄下でパラグアイのアスンシオンに伝道開始の許可を下し、パラグアイでの本格的な活動は1950年に始まった。

1952年、教会が正式に政府から承認され、大管長会は南米で礼拝堂と文化ホールの整った教会堂の建築を許可した。

翌4年の間にウルグアイ伝道部のバプテスマ数は230%にも伸び、パラグアイでは約100名の教会員が誕生した。

モンテビデオに最初のステーキ部が組織されたのは1967年で、8ワードに4,835名の教会員が所属していた。続いて1974年には2番目のステーキ部ができた。モンテビデオのアリエイ・フェドリゴッチは多忙な教会生活に思いをはせその発展の早さを語っている。彼はワード部会計書記として働いた後、1968年から1970年までペルーで伝道し、帰って

からは、モンテビデオステーキ部の広報係となり、1973年に結婚してモンテビデオ第3ワード部の監督となった。

その3ヵ月後、25歳の若さで新たに組織されたウルグアイモンテビデオ西部ステーキ部の第二副ステーキ部長に召された。

彼は熱意を込めてこう語る。「何も珍しいことではありません。私たちのステーキ部では、監督の8割が30歳以下です。高等評議員の平均年齢は35歳から40歳の間でし、ウルグアイ初期の教会員を親に持つ人が大勢いてモルモン2世の力が強みです。」

フェドリゴッチ兄弟の父親はモンテビデオ地方部長を務めた後、初代ステーキ部長会の副ステーキ部長に召され、現在はウルグアイ東部ステーキ部のステーキ部長として働いている。

パラグアイの教会は、20年ほどゆっくりした成長をたどったが、ここ3、4年で2地方部に8支部ができ、支部や地方部の役員に地元の指導者が召されている。



国際機関誌は以下の協力者に深い謝意を捧げるものである。O・ネルソン・ベーカー、アレダー・P・バーバー、ジョセフ・T・ベントレー、アントニオ・C・デカマルゴ、オマール・カナルズ、アリエ・フェドリゴッチ、ジェームズ・M・フィッシャー、ロブデン・J・グレイド、ランダル・ハッチ、ポール・W・ハイエス、ゴードン・I・アービング、ヘレン・ジェプソン、ディーン・ラーセン、ラリー・マドセン、フランシスコ・マキシモ、ルイス・A・ラミレ、ジュアン・パブロ・リボルディ、リリアナ・E・R・デリボルディ、エドソン・ロドニー・サッチ、グスタフ・サリク、リチャード・スコット、ウンベルト・デ・アンドレード・シルペイラ、アザエル・T・ソレンセン、ジャネット・W・ソレンセン、リン・A・ソレンセン、マニエル・スルエド、ジェイム・ピラロボス・タピア、アミー・バレンタイン





おもちゃ ばこ

ふしぎな^{セブン}7

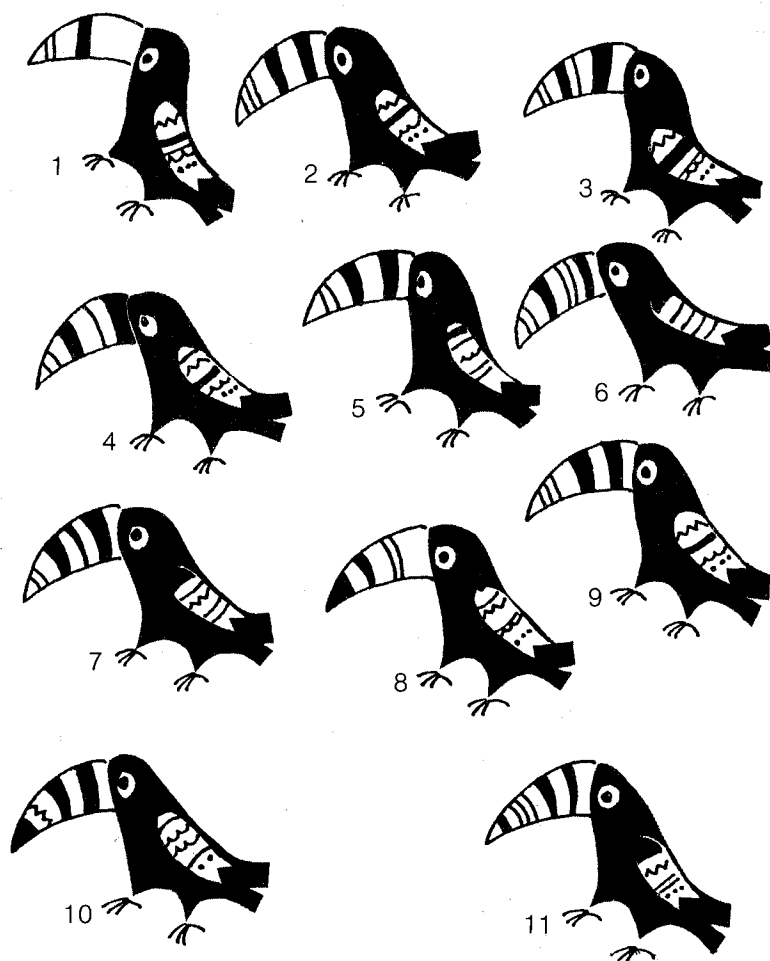
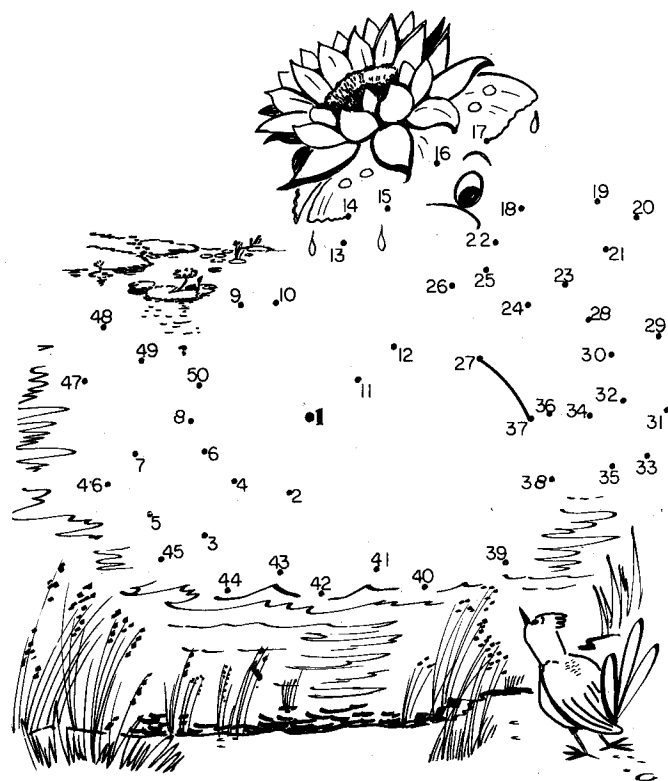
右のますの中に3~11
までの数字を入れ、たて
よこ、ななめの合計がす
べて同じになるようにし
ましょう。

ヘレン・R・サトラー

		7	

てんをむすびましょう

ロバータ・L・フェアオール



にたものさがし

ビバリー・ジョンストン

かんぜんと同じカラスは
どれとどれでしょう。

せいさん

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである」。また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなたがたに言うておく。わたしの父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日まで、わたしは今後決して、……飲むことをしない」。

彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。
(マタイ26：26—30)

イエスさまは十字架におかかりになった後、新世界のニーファイ人をおとすれました。そこでせいさんの儀式など、いろいろな教えをお与えになりました。イエスさまはニーファイ人にこう言われました。「……汝らも常にかくのごとくこの儀式を行わざるべからず。これをわれが汝らに現わしたるわが体の記念に行え。……もし汝らがたえずわれを記念せば、わが『みたま』必ず汝らと共に在らん」。(III ニーファイ18：6，7)

昔イエスさまが十二使徒たちにせいさんを受けるようにと言われたことにしたがって、私たちは今、毎週パンと水を受けています。

私たちはせいさんがどれほど大切なものかを忘れてしまうことがあります。単なる習慣としてせいさんを受け、イエスさまを思うことを忘れてしまっています。

イエスさまを思うというのはどういうことでしょうか。私たちは毎日イエスさまのお名前によって祈るとき、たくさんの方の祝福を天のお父さまに感謝するとき、もっと成長できるように助けを求めるときに、イエスさまのことを思い出すことができます。家族や友だちによいことをしたり、よいものは

を示したりするとき、私たちはイエスさまのことを考えます。バプテスマを受けるときもそうです。

毎週日曜日にせいさんを受けるとき、私たちは特にイエスさまの生き方と教えについて考えなければなりません。この1週間自分が何をしたかを考え、心からイエスさまのことを思っていたかどうかを考えるのは、とても素晴らしいことです。そして、これから始まる1週間について考え計画し、もっとよくなれるよう天のお父さまに祈ることができます。

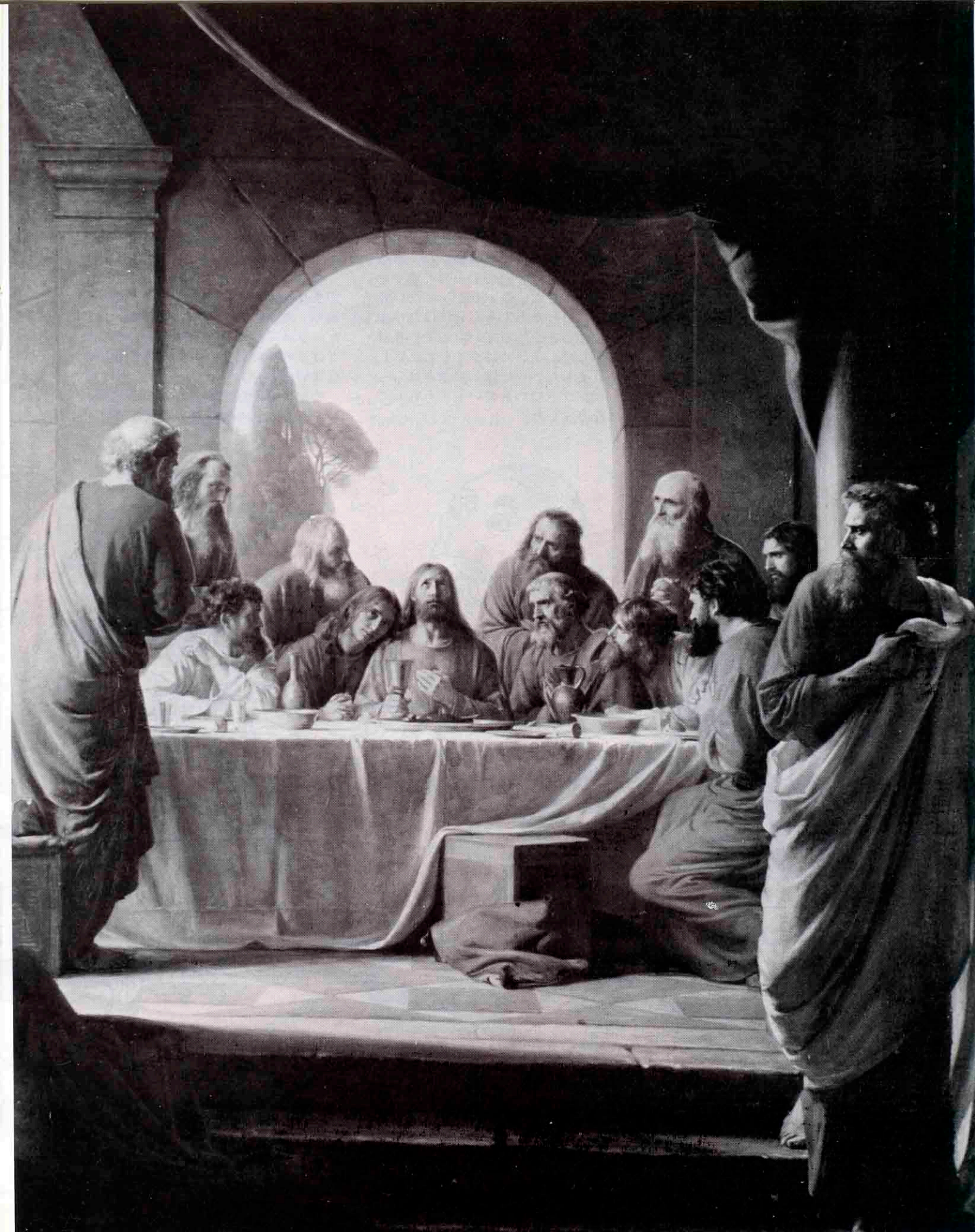
ところが私たちの心は時々ふらふらすることがあります。けいけんになることを忘れたり、救い主のことを考えなかったりすることがあります。でもせいさんがパスされている間、頭を下げて静かにしていれば、イエスさまの生涯や教えについてよく考えることができるはずです。

ここにひとつの歌があります。これは日曜学校やプライマリーでよく歌うものですが、この中には私たちがどのようにイエスさまを思ったらよいかが書いてあります。

十字架で苦しまれた
イエスさまのこと思うのは
むずかしいことではありません
静かにすわって、考える

静かにおぎょうぎよくして
こどもに愛を教えた
イエスさまのこと思うのは
むずかしくはありません

わたしはこどもだけれど
主を思うことができる



ライオン とラビ

ユダヤの昔ばなし

絵：ジム・クリステンセン



むかし、エルサレムに、心の正しいラビがすんでいました。エルサレムのまちの人はみんなびんぼうでした。そこで、なさけぶかいラビは、エジプトにいったお金をあつめてくることにしました。

たびをしていると、ラビはラクダにのったキャラバンにいました。そして、いっしょにつれて行ってくださいとたのみました。キャラバンのたいちようは、ラビがあんそく日にはたびができないことを知っていたので、6日たびをして、7日めはやすむことにしてくれました。ラビは、お金をはらって、エジプトにつれていってもらふことになりました。

やがて6日めの日がきたので、ラビは、たいちょうに、やくそくどおりやすみしょうといいました。するとたいちょうはいいました。「おそれいりますが、ラビ。あなたおひとりのために、ぐずぐずするわけにはまいりません。わたくしたちは、たびをつづけます。」

ラビは、あんそく日をやぶることはできませんでした。そこでラクダからおり、たびのふくろもおろしました。キャラバンがいってしまうと、ラビはさばくの中に、ひとりぼっちになってしまいました。

やがて日がしずみました。ラビはおいのりをし、うたをうたって、きよい



あんそく日をむかえました。ラビがうたをうたっていると、どうもうなライオンがすがたをあらわし、ラビのほうにむかってあるいてきます。ラビはこわくなりましたが、うたはやめませんでした。するとライオンはきゅうにあるくのをやめて、ごろりとよこになりました。そして、しずかにラビのうたをきいていました。しばらくするうちに、ライオンはぐっすりねむってしまいました。ラビもうたをやめると、よこになってねてしまいました。

つぎの日のあさ、ラビが目をさまして、あたりを見まわすと、ライオンがやさしい目でラビを見ていました。その日、ラビはずっと、おいのりをした

り、うたをうたったりしてすごしました。ライオンはラビのほうを見たり、すやすやねむったりしていました。

ゆうがたになって、そらにほしがかがやきはじめると、ライオンはおきあがって、のびをしました。そして、ラビのほうにちかよってきて、しっぽでせなかにのりなさいと、あいずをしました。ラビが、たびのふくろをかかえて、ライオンのせなかにのると、ライオンは、まっしぐらにはしりだしました。

ひとばん中、ライオンはさばくの中をはしりました。そして、つぎの日のあさには、キャラバンにおいついてしまいました。

キャラバンの人々は、ラビがライオ

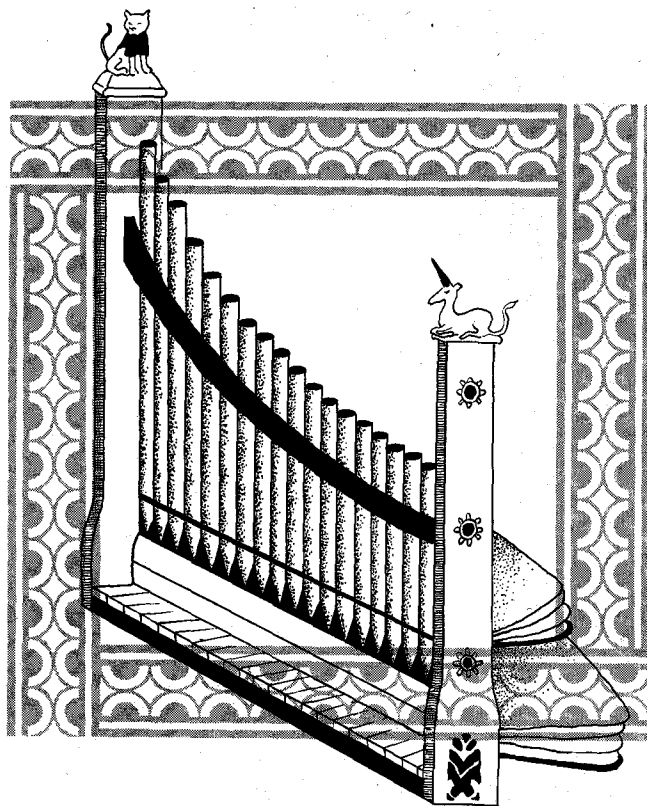
ンのせなかにのっているのを見て、びっくりぎょうてんしました。それだけではありません。ライオンはうやうやしくひざをかがめて、ラビをせなかからおろしたのです。ライオンは立ちあがって、ただけしく一ほえし、たてがみをふるわせると、さばくのかなたへきえていってしまいました。

ライオンさえも、このラビが、とてもきよい人であることをしっていたのです。これを見たキャラバンのたいちょうは、ラビのまえにひざをかがめて、ゆるしをこいました。

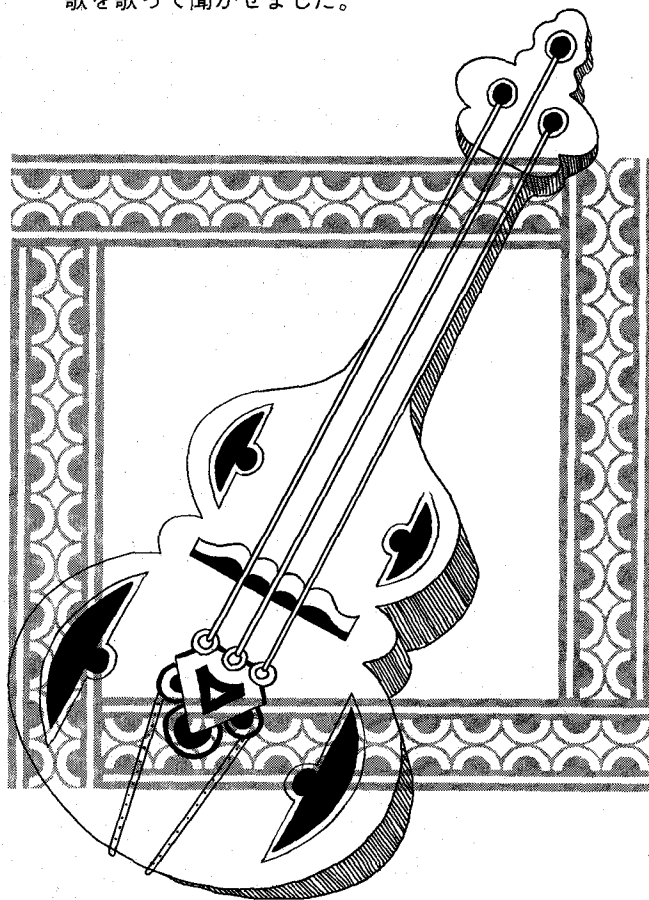
この日から、人々はこのラビをアリエルとよびました。アリエルはライオン、エルは神といういみです。



1. 中世には、持ち運びのできる小さなオルガンが使われていました。空気は、ふいごを動かして入れました。



2. 今から600年ほど前、ゆうかな騎士は、このギターのような楽器をひきながら、美しい女性たちに歌を歌って聞かせました。



音楽って？

みなさん、音楽って何だか知っていますか。音楽というのは、メロディーとリズムが美しく組み合わせることができるんですよ。はじめて音楽がつくられたのは、地球に人が住み始めたころと同じくらい、ずっと昔のことです。楽器を使って、音を組み合わせる音楽にするお話、聞いてみたいと思いませんか。

ではまず、音はどうして出るのかな？そうです、何かが動くとき音がでるんですね。この動くことを、むずかしいことばで振動と言います。何かが振動すると、そこから音の波がでてくるのです。池に小石を投げてみてごらんください。小さな波の輪が広がっていくでしょう。音の波もこれと同じと言うわけです。

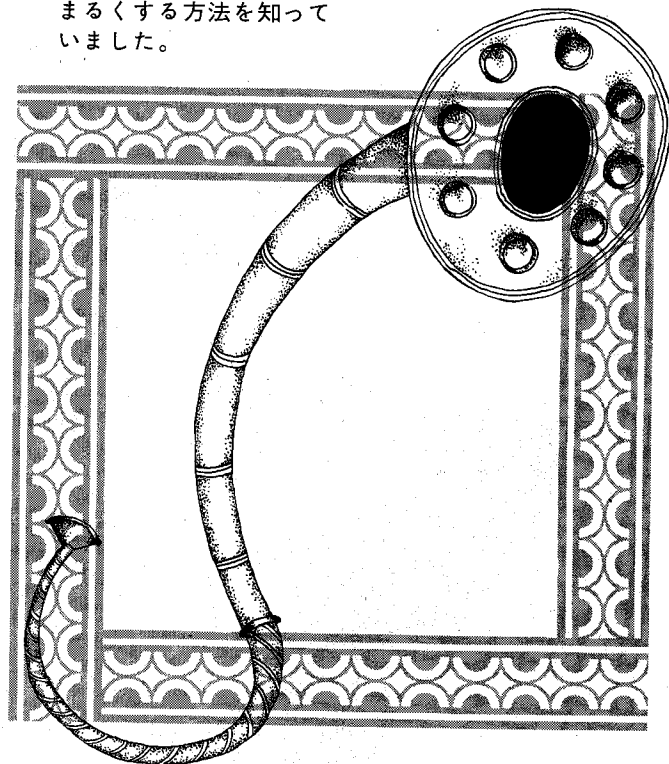
ものが速く振動すると、高い音が聞こえます。ゆっくり振動すれば、低い音になります。1秒間に物がふるえる回数のことを、周波数とよんでいます。

スプーンでフライパンをたたくと音が出ます。これは一番かんたんに音を出す方法です。フライパンをたたくと、

3. バグパイプは、ちょっと変わったすいそ
う楽器です。一番上のくちは、ふえのよ
うになっていて、メロディーを作ります。
その下のくちは、えんそうする人が息を
ふきこむパイプです。その下の3つのく
ちは、それぞれちがう音を出します。で
もひとつひとつのパイプは、ひとつの音
しか出ません。布のふくろは、空気を送
る役目をします。



4. 考古学者は、この絵のよ
うなつのぶえを見つけま
した。このふえは、少な
くとも今から4,000年前
に、スカンジナビア半島
に住んでいた人が、作っ
たものです。そのころの
人々は、金ぞくをまげて
まるくする方法を知っ
ていました。



フライパンがふるえますね。そして空気中を音の波が広が
って行くのです。その速さは、1時間に1,200キロも進んで
しまうほどです。こうして音は、みなさんの耳に聞こえて
くるのです。

たいこをたたくと、音楽が生まれます。でもたいこの音
の波は、とてもかんたんです。人間がはじめて作った楽器
がたいこだったのも、きっとたいこはとてもかんたんに音
樂が作られたからなのでしょう。昔、だれかが中ががらんど
うの丸太をぼうでたたいて、その音を楽しんでいました。
またある人が、動物の皮をぴんとはってそれをたたくとや
わらかい音が出ることに気づきました。こうしてたいこが
生まれたのですね。

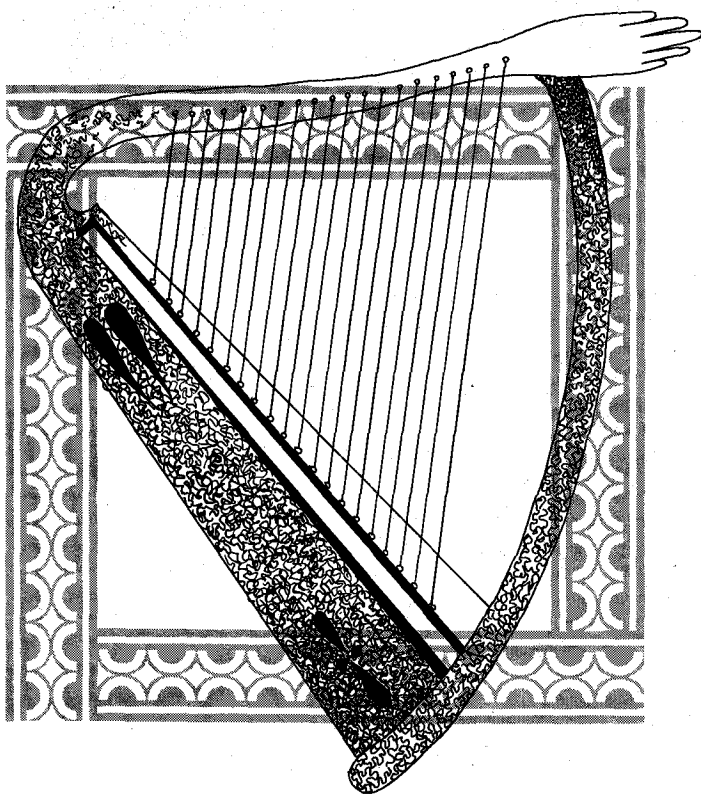
たいこは、タンバリン、トライアングル、木きんなどと
同じ楽器の仲間です。これらの楽器は、たたくと音が出ま
す。ですからこの楽器の仲間を打楽器とよんでいます。

糸を使って音楽を作るとなると、かなりむずかしくなり
ます。糸を使って音を出す楽器をわたしたちは弦楽器とよ

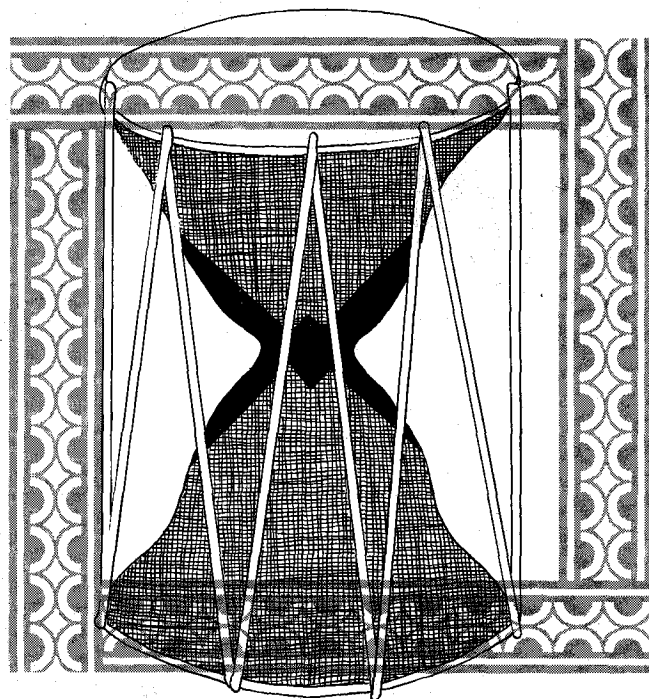
んでいます。あなたも弦楽器を作ってみませんか。まず本
のたての方向に、輪ゴムをとおします。そして両はしにえ
んぴつをはさめば、でき上がりです。指で輪ゴムをはじい
てごらんください。次に、左手の指で輪ゴムの左はしをおさ
えて、同じように輪ゴムをはじきます。左手のおさえる位
置をずらしてごらんください。振動する部分が短くなればな
るほど、振動は早くなり、ゆれる回数が多くなると、高い
音が出てきます。つまり、糸が短ければ短いほど、音は高
くなるのです。これが、弦楽器によって音楽が生まれるひ
みつです。弦楽器には、バイオリン、ハープ、ギター、こ
となどがあります。

こんどは、くだを使ってみることにしましょう。まっす
ぐなくだや曲がったくだの一方から息をふきこみます。す
ると音の波ができてその波が上下に動きます。びんの口に
くちびるをつけて、びんの口の向かい側の方向に、息をふ
いてごらんください。音が出ますね！ びんの中に、少し水
を入れて、ふいてみて下さい。こんどはちがった音が出る

5. ハープは、イエスさまがお生まれになるずっと前から使われていました。昔のハープはこのような形をしていました。



6. まん中のくびれているたいこは、もう何千年も前から東洋の国の人々に親しまれてきました。



でしょう。

くだの中に息をふきこむと空気の流れができます。そしてそれがくだのそこに当たると、くだの口まではねかえて外に出て行きます。そのふるえた空気がまわりの空気を振動させ、それがきそく正しい音の波となってみなさんの耳に聞こえてくるのです。

つのぶえやクラリネットのように、息をふきこんで音を出す楽器をすいそう楽器といいます。オルガンもその仲間です。

でも一番すばらしい楽器と言ったら、それは「声」です。あなたの声は、弦楽器とすいそう楽器を組み合わせた、すばらしい楽器なのです。あなたののどには、声帯というも

のがあります。これは糸やくだに当たるもので、のばしたり、ちぢめたりすることによって、いろいろな音を出すことができます。そしてあなたの肺は、空気を送ります。また口やのど、くちびる、舌は、音楽を作る手伝いをします。もちろん鼻もそうですね。鼻をつまんで、ハミングできるかどうかためしてごらんください。できないでしょう。

だれかが歌っている子守歌に耳をすましてごらんください。初等協会や、日曜学校や、聖さん会で、大きな声で歌ってみましょう。すてきなリズムにのって、ダンスをしてみませんか。そのときに思い出して下さい。あなたに聞こえるその音は、何かがふるえて出てきた音だということを。

後ろのものを忘れ

—ピリピ3：13—

ケネス・L・ヒグビー

ある新聞社の編集主幹が大学の卒業生を前にした講演の中で、一同に向かい次のように尋ねた。「皆さんの中で、のこぎりを使って木を挽いたことのある方はどれくらいいらっしゃるでしょうか。経験のある方はちょっと手を挙げてみてください。」

多くの手が挙がった。

それからこの主幹はもう一度尋ねた。「では、おが屑をのこぎりで挽いたことのある人はどれくらいいらっしゃるますか？」

ひとりの手も挙がらなかった。

「もちろん、おが屑は挽くことはできません。すでに挽いてしまった後のものだからです。言うなれば、おが屑は過去と同じようなものです。ですから、すでに終わってしまったことや過去の事柄が心配になり始めたときは、皆さんはのこぎりでおが屑を挽こうとしていることになるのです。」彼はそう語った。

過去の失敗や誤ちに必要以上にとらわれ過ぎて自分をみじめにしている人があまりにも多い。彼らはすでに犯してしまった誤ちや過去の出来事に苦悶するあまり、眠られぬ夜を過ごしている。軽率で衝動的な行動に走るとは

少なからずだれにもあり、それが原因で苦い経験をすることは多い。また、素晴らしい機会を自己の無神経さや見落しのために失ってしまうこともあるし、自己本位に陥ったり不親切な態度をとってしまったたりすることも多々ある。

そのような場合、私たちは絶望感を感じないではいられないが、ただそれだけの理由で人類たるべき存在から追放されるのが当然のように思い込む必要はないのだ。つまるところ、誤ちはだれにでもあることであり、時には役立つことさえあるのだから。犯した誤ちを知恵を用いて活用すること、そこに学び成長する機会があるのである。まさに「失敗は成功のもと」と言えよう。しかしながら、失敗や誤ちを建設的なものにすることができるのは、私たちがそれらを正しく分析し、そこから益あるものを見出し、その上で犯した失敗や誤ちを忘れ去るときだけである。

パウロは「ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ」（ピリピ3：13）と書いている。

私たちは、過去の失敗や誤ちについて考え過ぎるのは賢明ではないことを知っている。罪は善悪の判断の誤りとみなされるが、これと同じ結論が過去の罪に拘泥することにも言えるのではないだろうか。

聖典の中で繰り返し教えられているように、もし悔改めをしなければ、私たちは現世にあって罪の意識にかられるために苦しみ（アルマ14：6；38：8；ローマ2：9）、ましてやまた主の御前に立ったときには必ずや自分に罪のあることに気づいて苦悩するに違いない（モーサヤ2：38；モルモン9：3，4）。そして最後の裁きのとき私たちは自分が罪深い者であることに気づくのである。（アルマ5：18）

心の中に罪の意識を覚えながら主の御前に立つという不幸な有様を避けるにはふたつの方法がある。ひとつは罪を避けることであり、もうひとつは犯した罪を悔い改めることである。この現世にあって、罪を全く犯さず生涯を貫き通すことはほとんど不可能に近い。従って、罪を犯したときは真心から悔

い改めなければならないのである。

主は私たちに「罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし」（教義と聖約58：42；64：7）と約束しておられる。しばしの間、この約束がいかに重要な意味を伴っているかについて考えていただきたい。もし真心から罪を悔い改めるならば、私たちは主の目から見て、あたかもその罪を犯さなかったかのように清い有様となる。

パウロも（使徒23：1）ベンジャミン王も（モーサヤ2：27）、そしてジョセフ・スミスも（教義と聖約135：4）自分の良心が明らかで、いささかの憂いもないと言っている。なぜだろうか。彼らには全く罪がなかったのだろうか。そうではなく、むしろ彼らが罪を悔い改めたこと、そして主が、犯した罪を赦し、贖いによってその代価を払ってくださるという信仰を持ったからではないのだろうか。

主は言われた。「『われわれのとがと、罪はわれわれの上にある。われわれはその中にあって衰えはてる。どうして生きることができようか』と。」（エゼキエル33：10）どうして生きることができよう。仮にできたとしても、それは実にみじめな生涯に違いない。

過去の失敗や当惑したときの経験を思い出して悩んだり、過去の不満をいつまでも根に持ったりすること、あるいは悔い改めた罪を思い返して悩むことは、益となるよりもむしろ害となる方が多い。

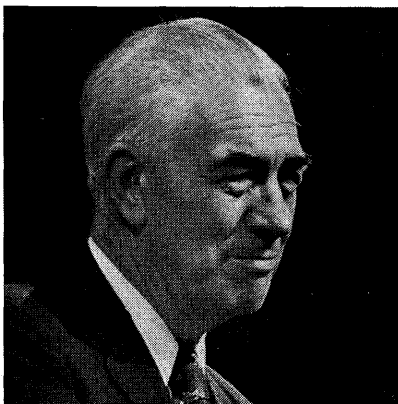
のこぎりでおが屑を挽くようなことをしてはならない。精神的にも霊的にも、過去の誤ちに深くこだわり過ぎることは健康とは言えないからである。誤ちを犯したなら、そこから何か将来に役立つものを引き出し、それからパウロが「後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ」と言ったように、その誤ちを捨てようではないか。

ヒグビー兄弟はプロボステーキ部の高等評議員であり、ブリガム・ヤング大学で心理学の助教授を務めている。

永遠の絆

永遠の来世における私たちの場所は
現世での行ないによって決定される

十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン



私はこの機会に、キンボール大管長の偉大な指導力に対して深い感謝の意を申し述べたいと思う。あなた方も必ずや私と同じ気持ちを抱いておられるに違いない。キンボール大管長は、私たちに霊的な感動を与えてくれる。彼は力ある神の人であるが、非常に謙遜な人でもある。また彼は人と親しく交わるといふ特質を持っている。つまり、私たちはこぞって、この上なく大管長を愛しているということである。私は今日、この場において、私たちが大管長の指導にいかに感謝しているかということと、私たちが心と霊のすべてを尽くして大管長を支持していることをあなた方に代わって申し上げても差しつかえないのではないだろうかと思う。私たちはキンボール大管長の指導に深く感謝するものである。

私の友人にケネスという名の人物が

いる。彼には美しい妻と幼い4人の子供がいて、彼自身はと言うと善良な一市民であり、しかも仕事もよくできる男である。

彼の家族は一致団結しており、何をするにもどこへ行くにもいつも一緒に別行動を取ったことがない。遊ぶときにもである。これを知って、中には、一体彼らはこれ以上何を求めようというのだろうかと思議に思う人があるかも知れない。しかし、彼らにはひとつ足りないものがあるのである。しかも非常に重大なものが。すなわち、この家族には自分たちが今味わっている幸福と家族の絆を永遠のものとする何が欠けているのである。

彼らは現在の生活にこの上なく満足しているので、彼らの未来に、あるひとつの可能性が横たわっているなどとは夢想だにしない。それは、今の生活がすべて終わりを告げ、今ある家族の幸福や絆がもはや続かず、またその喜びが単なる思い出にしか過ぎなくなる日がやってくるかも知れないということである。

ケネスと妻のルシルは共に善良で正直で徳高い人である。ふたりは教会に行かず、教会なしでも十分立派な人間になれると考えている。彼らは子供たちに正直と徳とを教え、教会が自分たちに教えてくれるのは精々それぐらいだと考えている。

ともかく、彼らは家族で楽しく過ごすために週末の時間が必要だと主張する。土、日曜はケネスが仕事から解放される数少ない日なのである。そこで教会に出かけることは全く彼らの生活に水を差すことになるし、週末ごとの計画に支障を来すことになるのだ、とそう彼らは考えるのである。

ここで私はケネス一家に、また彼らと同じような状況にある家族の方々すべてにお話したいと思う。ケネス、しばしの間私たちの助言に耳を傾けてくれたまえ。

私たちは君が家族をどんなに深く愛しているかよく知っている。だが、もっと強く深い愛があり得ることを忘れてはならない。人生とは予測のつかないものだ。今味わっている幸福や喜びもいつまで続くか保証はないし、永遠に続くことはないであろう。

ケネス、君は同じ職場の仲間ラルフ・スチュアートのことを覚えているだろう。事故に遭って不具となり、果ては命を落としてしまった彼を、一体彼の家族の絆はどうなったのだろうか。そして今、彼らの週末のレクリエーションはどこに行ってしまったのだろうか。このようなことを話して気にさわるものがあつたら許してもらいたい。

君は現実的で、いつも物事を真正面からとらえる人だ。それなのに、なぜ自分の家族のこととなるとそうしないのか。

先日、通りかかった美しい石造りの教会の前に、小ざれいな掲示板が出ていた。翌日曜日に話される牧師の説教のテーマを告げるもので、次のような質問が書かれていた。「あなたは永遠という時をどこで過ごそうとしていますか。」

私はその言葉に目をひかれ、足を止めて考えていると、何年前か、大きな飛行場でリチャード・L・エバンズ長老と一緒にいたときのことを思い出した。そのとき、私たちは人々が急ぎ足で往来する様子を見ていたが、飛行機に向かって駆けて行く人もいれば、夕

クシーや友人を捜して歩いている人もいた。

エバンズ兄弟は人々の流れから目を転ずると、私に向かってこう尋ねてきた。「あの人たちは実際、自分がどこに行こうとしているのか考えているだろうか」と。

ところがケネス、君と同様に彼らはその問題にいささかの注意も払っていなかったのだ。

私は君に尋ねたい。「君は実際どこへ行こうとしているのか。それに君の家族もだ。君の前途には楽しみばかりがあるのだろうか。また、いつも家族と一緒に生活ができるのだろうか。君は永遠ということについて考えたことがあるのか」と。私たちは日曜学校で次の讃美歌をよく歌ったものだ。

輝く家は 永遠の生命
星は輝く 働きゆかん

また次のようにもある；

天に向いて 日々に進まん
善き業なせば 家近づく

「さかえに進まん」

讃美歌168番

君には忘れてしまったものがひとつあるのではないだろうか。この古き良き歌は、まさにそのことに私たちの心を向けさせてくれるのだ。

ケネス、永遠の世界は現実存在するのだよ。私は、君がすでにそのことを知っている確信しているし、天に

永遠の御父がおられることも信じていると思う。しかし、私たちはその永遠という存在の中であって、自らのためにふさわしい場所を確保すべく何をしていると言えるだろうか。

私たちは、神が最も慈悲深い御方、すなわちこの上なく慈悲ある御父であるが故にまた正義の神であるという事実をすべて受け入れなければならない。

私はそう考えている。それならば、天父が私たちに望んでおられるのは何なのだろうか。

山上の垂訓で救い主が命じられたように、主は私たちが御父のようになることを望んでおられる。（マタイ5：48参照） 神の子である私たちは、将来、神に似た者となるには十分な素質を内に秘めているのである。子供が成



長して親と同じようになるのはごく当然のことではないか。しかしながら単なる心の中の願いであったり、ある特定の人格を身につけても、それが自分自身を満足させるだけのものではなかったならば、私たちは神に似た者となることはできない。

私たちが従うべき計画は主御自身が定められたものであり、その計画のみが私たちに望み通りの結果をもたらしてくれるのである。この計画は、現世においても来たるべき世においても成功を収めるための公式となるものである。もしこの計画に従わないとすれば自分自身を拘束することになる。これはすべての面において同じではないか。ケネス、君は学校で化学を勉強したことがあるだろう。そこで、実験のとき公式通りにしなかったらどんな事態が起るか予想できるに違いない。また履修課程を修めなければ卒業できないこともわかっているはずだ。永遠の来世についても同じことが言える。私たちは主の公式、すなわち主の福音に従わなければならない。

そのようにするならば、君が今、味わっているこの家族の絆をいつも持ち続けることができる。そればかりか、死も復活もその絆を妨げることはできないのである。君もそうありたいと思わないだろうか。

しかし、不完全な方法から完全なものに生じ得ないことを主は承知しておられる。それ故、主は違背することのないようにとの訓戒を伴った完全な公式を与えて下さったのである。学校においてもそうであったように、主の公式に従わず、またその計画を心から完全に受け入れなければ、祝福を授かることはできないのである。

主が御自身の律法を破られるはずはないということを銘記して、主が言われた幾つかの事柄に目を向けてみよう。従順は一要素である。従って神の律法に従うことは全く道理にかなったこと

である。

主が従順について語られた箇所を2、3読んでみよう。救い主はニーファイ人に次のように言われた。

「われに來りて救いを得よ。まことにわれ汝らに告ぐ、われが今汝らに下したるこの命令を守らずば、決して天の王国に入るを得ず。」(Ⅲニーファイ12:20)

ここで、この言葉が君にとって、また君の家族にとって何を意味するのか考えて欲しい。よく研究し、よく考えてくれたまえ。「われが今汝らに下したるこの命令を守らずば、決して天の王国に入るを得ず」これは非常に重大な言葉である。

教会初期に、救い主は啓示によって本質的に同じことを言われた。「たえずわが誠命を守れ、……されど、わが誠命を守らずば汝はわが居る所に来るを得ず。」(教義と聖約25:15)

ケネス、君は神権を授かっている。主は神権を付与された者の将来に大いなる約束を与えておられるが、そのための条件を次のように定められた。「それは、汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84:44)

永遠という時を主と共に過ごそうとするならば、私たちは主が求めておられる事柄を行なうことによってその神権を得なければならない。君にはその意味が理解できるだろう。もし永遠に主と共にありたいと望むなら、私たち自身が主に似た者となることはもちろん、妻や子供たちにも同じことが要求される。しかし、私たちがそのようになれるのは、主の戒めを守り、主の教会にあって主の定められた計画に従うことによってのみである。教会のプログラムとはまさしく救いの計画であり、その道に従うことによって私たちはキリストの持つておられるような特性を培い、キリストに似た者となることができるのではないか。

もし私たちがキリストに似た者でない状態のままで主の御前に立つことができたとしても、私たちは全く場違いな感じしか受けないのではないかと思う。もちろん、このような方法で主のもとに帰ることはあり得ないが。

不断の努力なくしてキリストのごとき人格を形成することはできない。私たちはある過程を踏まえて成長するのであり、それはキリストの福音を自己の指針とすることによってのみもたらされるということを承知しなければならない。

またそのことに生半可な態度であってはいけない。私たちはすべからず心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くして主に仕えなければならない。また主の教会において活発にその業に携わることもキリストの福音の一部であることを覚える必要がある。主はそのことを強調して言っておられる。「このキリストの教会に属する者は皆教会の誠命と誓約とをすべて遵奉すべし。」(教義と聖約42:78)

私たちは、自ら蒔くところのものをまた刈り入るなりと教えられている。これは刈入れの律法である。畑に麦の種を蒔けば麦が育つ。それと同様に、私たちがもし人格形成の上で義の種を蒔くならば、義の実を刈り取るであろう。主御自身が言われた通りである。

「何事にても汝ら蒔くところのものをまた刈り入るべければなり。この故に、汝ら善の種を蒔かばそのむくいとしてまた善の実を取り入るべし。」(教義と聖約6:33)

このように刈入れの原則はすべてに適用される。例えば、主は言われた。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。」(マタイ6:14)

また「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与え

られるであろう」(マタイ7:2)と仰せになった。

言い換えれば、今この場で来世においても家族の絆を保ちたいと計画するならば、永遠の来世に赴いたときその絆が得られるのである。しかしその目標に向けて努力を払わなければ、その祝福は奪われてしまう。

ケネス、君に尋ねたいことがある。君は君の奥さんに永遠の来世をどこで過ごして欲しいと思っているか。それに君の子供たちもだ。君は奥さんや子供たちをいつまでも自分のそばに置いておきたいと思わないだろうか。そうでなければ、君はいつかは離れ離れになってしまう計画を立てていることになるのだ。

君は、君が現世においてしり込みしたばかりに、奥さんが夫と子供を失ったまま永遠の来世を送らなければならないようなはめに陥ることを望むだろうか。

また君の子供たちが君のために父母との家族の絆なくして孤児として過ごすことを望むだろうか。

君のとり行動が君の妻子の永遠の生活に影響を及ぼすことを、君は自覚していないのではないか。子は親の模範に従うものである。君が示す模範次第で子供たちが神を信じ、神に仕え、また清い習慣を身につけるか否かが決まるのだ。そして同様に子供は自分が受けた影響をまたその子供、つまり君の孫に及ぼす。そのことがわかれば、今の君の行ないが生まれ来る君の子孫にどんな影響を与えるかも理解できるだろう。

君は彼らに何を望むか。最善のものか、それともそれ以上のものか。

今こそ君と神との関係を固く結ぶときではないか。君自身の救いのために君の奥さんのためにまた君の子供たち孫たちのために。

私たちは皆家族の幸福を願っているが、不従順や神を無視するところに幸

福はあり得ない。なぜ世の道に従うのか。そこに心の満足なぞ得られようはずがない。また払う犠牲も大きいのだ。

これまで述べてきたように、家族の永遠の絆を得るには、神殿結婚が必要である。それ以外の道は考えるだけでも恐ろしい。というのも、私たちが神殿結婚を拒絶すれば家族の絆を来たるべき世まで持ち続けることはおろか、伴侶なくして果てしなく別離孤独のままでいなければならないと主は仰せになっている。

スペンサー・W・キンボール大管長はこの点について次のように語っている。

「永遠ということ、永続する幸福、神にまみえ神と共に住まうという特権、あなたがたはこれらのことを自ら危くしてはいないだろうか。調査研究や瞑想の欠如のために、すなわち偏見や誤解、知識の不足から、この大いなる特権を自ら失ってはいしないのか。

また自らを永久に別離孤独で生き、他人に仕える者にしてはいないか。子供が死んだりあなたが世を去るとき自分の子供を見放しすみすみ孤児にしたいと思うのか。生涯に得た最高の喜びすべてが『更に附け加えられ』、強められ、いや増し加えられて永遠のものとされるというのに、ただひとり孤独なままで永遠の道を進みたいと思うだろうか。それとも……この大いなる真理を無視し、退けたいであろうか」

そして大管長は言われた。「皆さん、

どうかこの呼びかけを無視しないでいただきたい。あなたがたの目を開いて見、耳を澄まして聞くことをやめないようにとお願いする。」「(「聖徒の道」1975年1月号)

そこでケネス、私は君にもうひとつ尋ねたい。君にとって10人のおとめの譬話はどんな意味があるだろうか。その中の5人は思慮が浅く、5人は思慮深い者であった。思慮深い者たちは将来のために準備をしたが、思慮の浅い者たちは何の備えもしなかったため主の前から閉め出された。そして用意のできた思慮深い女たちは主に迎えられたのであった。

ケネス、私はキンボール大管長と共に君のような立場にいる人皆に、そしてその家族に訴える。主の命令を受け入れ、主に仕え、永遠に主と共にいることのできる場所を得るようにと。

救い主の約束は私たちが主の命令を受け入れて初めて大いなる約束となる。主の仰せにある通りである。

「われを受け入る者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入る者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。』(教義と聖約84:37、38)

しかも主を受け入れることは私たちが幸福になるための特権でもある。主イエス・キリストの聖なるみ名により心からお祈り申し上げる。アーメン



死の後には？

死も障害とはならず、忠実な子らに神の計画は及ぶ

十二使徒評議員会会員
リグランド・リチャーズ



兄弟姉妹の皆さん、この素晴らしい大会に共に集うことができ、どの部においても音楽や兄弟たちの話を堪能できたことを感謝する次第である。きょう私は皆さんの前で、天父と、私たちのために贖罪の犠牲として命を捧げられた御子イエス・キリストと、また、素晴らしい生き方を教えてくれる回復された主の福音に対し、私の抱いている愛を申し述べたいと思う。この福音は、地上での働きを終えた後に永遠の世界が存在することを私たちに教えてくれるのである。

私は、教会を巡り、伝道部を訪れ、伝道本部の人々と会い、教会員の信仰を感じるたびに抱く聖徒たちへの愛を、ぜひともお伝えしたい。私たちは、現在全世界で教会が著しい成長と発展を遂げているそのゆえんとして、みたま

が豊かに注がれていることを神に感謝申し上げる。私は高貴なる指導者キンボール大管長とその副管長を、神に感謝申し上げる。私をはじめ教会員はすべて彼らを愛している。それは彼らがまことに御父のしもべだからである。

私はきょう、この世で成人して結婚の誓約を交わし、自分の子供をもうけるときを待たずに死んだ子供の親たちに向けて、お話をしたいと考えた。そのような経験のある家庭は少なくないと思う。

各国の戦地で命を失った青年たちは多いであろう。伝道地で亡くなった青年たちもあろう。私がオランダ伝道部長であったとき、伝道部内のひとりの素晴らしい宣教師が永遠の栄えに他界したことがある。

私はまた、日の栄えに共に昇栄するにふさわしくない男性と連れ添いたくないために、この世で結婚の機会を持たない忠実な素晴らしい大勢の女性たちのことを考える。その多くは伝道に出て、御父のみ国の建設とシオンの若人の育成のために勤勉に働いている素晴らしい女性たちである。

心に感じていることを、私自身の家族を例にとって話させていただきたいと思う。私共夫婦はオランダで伝道に

携わっていた間に一女に恵まれたが、数年して帰国してからその子は亡くなった。妻はその子が生まれたときに、天使が連れてきたのを見たような気がする。すると何度も私に言っていたのだが、その子は死んでしまった。また、私は妻の4人の姉妹のことも考える。

そのうちのひとりはいきょう、扶助協会中央管理会長会の副会長として皆様方の支持を受けたが、他の3人も、才能は多少違っても皆立派な素晴らしい女性である。

私は3歳半で亡くなった子供のことを考えると、神が天地を統治しておられ、あの子もいつかは自分の栄えに入って、地上で両親に育てられた4人の姉妹と同じ機会にあずかるという信仰を得ていることを、神に感謝するのである。また、使徒パウロが「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる」(I コリント15:19)と言ったその言葉をありがたいと思う。つかの間のこの世では、神が忠実で誠実な者たちのために考えておられるすべてのことを、すべての子らのために成就されるのは不可能なことであろう。

高価なる真珠に記されているモーセの言葉が心に浮かぶ。「見よ、これわが業にしてわがが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」(モーセ1:39)ときどき考えるのだが、私たちはこの聖句について深く考えてみたことがあるだろうか。「人に不死不滅をもたらす」ことが、ロムニ副管長がけき指摘された通り、私たちが復活の後にもはや死ぬことはないということを意味するものだというこ

とは、理解できると思う。では、永遠の生命はどうであろう。そのことを考えると、私はこの言葉の中に、神が忠実に誠実な子供たちの将来に計画しておられるすべてのことは、神のみこころにかなうときに必ず実現するという感を覚えるのである。

モルモン経の中には、人はみな同じときに生まれるわけではないし、同じときに死ぬわけではない、それは問題ではないということが書かれている。(アルマ40：8参照) ここでアブラハムの言葉を思い浮かべるのだが、彼は霊たちが地上に置かれるのを見たときに、主は彼らが命じられたすべてのことを行なうかどうかを試そうと言われた。「而して、最初の位を保つ者は更に附け加えられ」(アブラハム3：26)。これはこの世に来る前の霊界でのことである。「第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に附け加えられん」(アブラハム3：26) 亡くなったあの子は、自分の第二の位を齢いっぱい保ったのである。

そして、私は主が予言者ジョセフ・スミスに告げたま言葉のことを思う。「神の業、計画、目的が破れ、また水泡に帰するは共に有り得べからず」(教義と聖約3：1) これはすなわち、子らのために宣言されたことを成就しようとする神のみ手は、何びとも阻み得ないということである。さらに教義と聖約の中で、主は言っておられる。「その企図は敗れることなく、またその御手を止め得る者絶えてなし。永遠より永遠に主は同じにして、その齢は尽くることなし」(教義と聖約76：3、4)

また、主は予言者ニーファイにこう語られた。「そはわが業の今なお完成

せざるのみならず、人間の終りの時になるも、またそれより進みて限りなき未来になりても完成せざるべからざればなり」(IIニーファイ29：9) さてここからわかるのは、神は高価なる真珠に出ている、ふさわしい者の頭にとこしえに栄光をつけ加えるという働きが終りを告げる時は決して来ないということである。

ひるがえって私の家族について考えれば、4人の娘の後に生まれた息子はたくましい青年に成長した。しかし彼は、私がカリフォルニアでステーク部長をしていた当時、海岸で事故に遭い死亡した。弱冠16歳になろうとしていたときで、父の私と同じほどの背丈があった。あの子の兄弟について考えてみると、きょうこの場にいる彼らにはみな家族があり、ひとり十二使徒会地区代表として働いている。このことから、私には亡くなった息子が来たるべき永遠の世で、この世にまだ生きている兄弟たちよりも劣った栄光を受けるとは考えられない。彼が死んだとき、高校の校長先生が訪問され(教会員ではなかったが)、リチャーズ姉妹に「彼は私がこれまで教えた生徒の中で一番良い子でした」と話をされた。あの子が大人になっていくにつれ、私たちもそのように感じたものだった。

私はまた、ちょうど同じ年齢で死んだ幼い孫娘のことも考える。その両親も兄弟姉妹もきょうこの場にいる。その子は数日病の床に伏した後、16歳で死んだ。美しい乙女だった。ほかの子供たちがこの世に生きていて受けるすべてのものを、あの孫娘もいつかは受けられるという神の計画がなかったとしたら、天父に対する、また天父の御計画の完全さに対する私の感謝の思い

は薄れてしまっていたであろう。

イエスの言われたたとえ話が思い出される。

「あなたがたのうちで、だれかが邸宅を建てようと思うなら、それを仕上げるのに足りるだけの金を持っているかどうかを見るため、まず、すわってその費用を計算しないだろうか。そうしないと、土台をすえただけで完成することができず、見ているみんなの人が、……あざ笑うようになる」(ルカ14：28-30)

もし神が人に不死不滅と永遠の生命を与える仕事を始めながら、その仕事を完成させる機会を用意されなかったとしたら、邸宅を建て始めながら完成することのできない建築者と同じであろう。

また私の家族のことに戻るが、妻の妹がつい先頃亡くなった。彼女は伝道にも行き、補助組織で働いた気高い女性である。ところが彼女は生涯独身であった。私は、主の御計画は不完全であるはずがなく、彼女はいつか、自分の姉(私の妻)がすばらしい家族を持って受けたと同じすべての喜びを得られるはずだと信じている。「その企図は敗れることなく、またその御手を止め得る者絶えてなし」(教義と聖約76：3)

それで、私は福千年のときを神に感謝している。その千年間にいかに多くの仕事が残っていることか。それについて多くをお話する時間はないが、イザヤの言葉が心に浮かぶ。イザヤは福千年をかいま見た。彼は、新しい天と新しい地ができ、おおかみと獅子が共に伏して獅子が牛のようにわらを食べる時代を見た。民は家を建ててそこに住み、ぶどう畑を作って、その実を食



べる。彼らが建てる所にほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。すべての人はみな自分の手の働きを享受するからである。(イザヤ65：17—25, 11：6—9 参照)そして、イザヤはこう記している。「彼らは主に祝福された者のすえであって、その子らも彼らと共にいるからである」(イザヤ65：23) これは代々の家族のつながりを意味するように聞こえないであろうか。

また私は使徒パウロのこの言葉を、神に感謝している。「ただ、主にあっては、男なしには女はないし、女なしには男はない」(Iコリント11：11) これは真実であり、主は、子らがいつかはその大いなる祝福を受けられるように計画しておられるはずである。

ここで、その福千年について主のみ言葉を読んでみよう。

「また死ぬることなきを以て如何なる悲しみもあることなからん。その日、誰にても幼児は年をとるまで死ぬることなく、その命は樹の齢と等しかるべし、而して、彼の死ぬるや眠ることなからん。すなわちこの世に於て眠ることな

くして、瞬く間にその身変りて天に上げられ、その休息は栄光に輝かん」(教義と聖約101：29—31)

人は木の齢まで生き、またたく間に身を変えられるのである。

さて、もうひとつ予言者ジョセフに対する主のみ言葉を読みたいと思う。

「地はゆずりとして彼らに与えられ、彼らは殖え満ちて強くなり(夫婦という関係がなければ殖えることはできない)、その子孫らは罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き、主は彼らの王にして立法者たるべし」(教義と聖約45：58, 59)

日の光栄の王国を受け継ぐ者たちについて、主はこのように啓示された。

「……この光栄は最高完全の光栄にして、永久にその子孫の続くことなり」(教義と聖約132：19)

そのため、私はいつか霊界で、息子の選んだ花嫁に会える日を楽しみにしている。息子が、先ほど述べたかわい いめい(私にとっては孫娘)のようにすてきな相手を見つけられるとしたら、それは何といううれしいことであろう

か。そのことを正しく理解していただくために、福千年に起こる出来事についてブリガム・ヤング大管長とウィルフォード・ウッドラフ大管長の言葉を読んでみたい。

ヤング大管長はこのような語っている。「この業を遂行するために、ひとつの神殿のみならず何千の神殿がなければならず、何千何万の男女がそれらの神殿に入り、主の啓示以前に生きた人々のために儀式を行なうであろう。」(「説教集」3：372) 考えてもみてほしい。何千の神殿が建ち、何万の人々がその神殿に入るとしたら、神殿の儀式を待つ霊たちのために主がどんなことを用意しておられるか、いくばくか想像もできよう。

また予言者ウィルフォード・ウッドラフは次のように語った。「救い主来臨のときには、一千年がこの贖いの業に捧げられ、神殿がこのヨセフの地——南北アメリカのそこかしこと、ヨーロッパやそのほかの地に出現する。」(「説教集」19：230)

私はきょうの話を私の信仰をもって閉じたい。主は御自分の業を心得ておられ、早くして世を去った人々が悲しむことのない計画を用意しておられると、私は信じている。そこで使徒パウロの言葉を結びとしたい。パウロは第三の天、神のパラダイスに捕らえ行かれて、書くことの許されないものを見た。彼はこう言っている。「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。」(Iコリント2：9) これこそ、神を信じる私の信仰である。主イエス・キリストのみ名により、皆様方に私の祝福を捧げつつ、アーメン。

山の上に ある町

ワシントン神殿は偉大なる灯台で
ある。だが、最も大いなる灯台は私
たち自身の生活でなければならない

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー



兄弟姉妹、私はあなた方の信仰を強める話ができるようにと、聖霊の導きを求めるものである。私は最近大きな経験をした。1週間のほとんどを他の人と共にワシントン神殿の入口に立って、特別な来賓の接待に過ごしたので

ある。来賓は合衆国大統領夫人や最高裁判事、上院議員、下院議員、各国大使、牧師、教育者、実業界指導者であった。特別招待のその週を皮切りに、別に30万人以上の訪問者があの聖なる建物を見学した。

新聞や雑誌は大きなスペースをさいてワシントン神殿の特集をし、ラジオテレビは大々的に報道した。近年東部でこのように衆目を集めた建物がはたしてあったかどうか。

見学者はほとんど例外なく、敬虔に建物を鑑賞した。心に深く感じる人も多かった。フォード大統領夫人は神殿を去るときに、「本当に素晴らしい経験でした。……だれもが靈感を受けたでしょう」と語っていた。

連日神聖な建物に立って合衆国内外のそうそうたる人々と握手を交わしていると、ふたつの思いが幾度となく心をよぎるのだった。過去の歴史と、そして現在と将来に対する思いが。

フォード大統領夫人がスペンサー・W・キンボール大管長と並んでカメラのフラッシュを浴びている姿を拝見しながら、私の心は135年の昔に飛んでいた。当時教会員はイリノイ州コマースで家もなく窮乏を極め、厳しい冬を迎えようとしていた。彼らはミズーリから追われ、安住の地をイリノイに求めてミシシッピ川を渡って来たのだった。彼らは川が大きく蛇行する美しい場所に土地を購入したが、ひどい沼地で、馬も牛も泥だらけになった。この土地が、非常な努力と犠牲の末にあの美しいノーブーとなったのである。しかし1839年のコマースは、家を追われて寄る辺のない何千という人々の集合地であった。彼らは労苦の年月を後に、家や納屋や教会や公共の建物や数多くの肥えた農地を残し、暴徒に殺された愛する人々をミズーリの地に葬って来たのだった。略奪にあい貧窮しながらもミズーリ州から賠償を受けられないでいた彼らは、合衆国大統領と議会に請願しようと決意した。ジョセフ・スミスとエライヤス・ヒグビーが、ワシントンへ行く役を受け持った。

ふたりは軽便馬車を駆り、1839年10月20日にコマースを出発した。ワシントン到着はその5週間後で、第1日目の大半は安い宿搜しに費やされた。ハイラム・スミス宛の手紙に「この町で一番安い宿を見つけた」（*History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」4:40）と記されている。

彼らは当時の大統領マーチン・バン・ビューレンを訪れ、その主旨を述べ

たが、大統領は「お説はごもっともですが、私としては何もしてさしあげられません。……あなたがたに肩入れをすると、ミズーリ州の票を失うでしょうから」（「教会歴史」4：80）と返事したのである。

ふたりは次に議会に訴えた。焦燥の数週間がたち、ジョセフは馬を飛ばしてコマースに帰ってきた。ヒグビー判事はあとに残って請願したが、結局、議会は何ら手を打たないと知らされただけであった。

ジョセフ・スミスがワシントンで拒否にあった1839年から、スペンサー・W・キンボール大管長が歓迎され重んじられる1974年までの間に、公務につく人々の教会に対する信頼と敬意がどれだけ増したとか。過去と最近とワシントン神殿で過ごした素晴らしい日々を通じて私の胸に去来した思いは、そのようなことであった。

幕明けの1839年からこの1974年の間には、さらに数々の出来事が刻み込まれている。1844年6月27日ジョセフとハイラムの死、ノーブーの崩壊、川を渡ってアイオワ地方へ向かう荷馬車の長い隊列、1846年運命の春に雪と泥の中で野営する開拓者、ミズーリ州ウィンタークォーターズ、人々を襲うペストやジフテリアや熱病、請願に耳を貸さなかった当の政府からの召集令状、ネブラスカとワイオミングのエルクホーン川、プラット川、スイートウォーター川を渡り、高地サウスパスを越えるソルトレーク盆地までの決死の行進、東部や英国からあるいは手車を引き、あるいはワイオミングの冬に命を失いながらあの長い道のりを進んだ何千何万の人々、入植した盆地での抜いても抜いてもまたもはびこる雑草との果てしない戦い、乾ききった土壌に水を引くための何キロにも及ぶ掘割り作り、

偏見から生じた攻撃と非難の叫び、この同じワシントンで制定され、連邦政府の保安官によって履行された法の下での市民権の剥奪。これらは、はるかな歴史を彩る数ページである。

この厳しかった時代が、今や過去のものとなったのはありがたいことである。それら試練の炎の中を忠実にくぐり抜けてきた人々に感謝を捧げる次第である。私たちが今受けているもののために彼らの払った代償は、何と大きかったことか。兄弟姉妹、私たちはそのことを忘れてはならない。それ以来正しい生活によって、教会員のために尊敬を受けるに足る地盤を築きあげてきた人々に感謝するものである。そして末日聖徒イエス・キリスト教会に対する理解が増し、評価と認識が広く豊かになったより良いこの時代を感謝する。

好奇の心をもってワシントン神殿を訪れ、感謝をもち、時には目に涙をたたえて去る大勢の人々と握手を交わしながら、私はそのようなことを考えていた。

しかし、これらはおおよそ過去のことである。現在と将来にはまた別の思いもあった。いつか私はハイウェイを走る人々と一緒になって、森の丘から天に向かってそびえ立つ主の宮居のあの輝く尖塔を、驚異の眼で見上げたことがあった。そのとき、心には聖句の言葉が浮かんできた。山の上に立って民に教えられたあの主のみ言葉が。

「山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの

父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5：14—16）

今やワシントン神殿ばかりでなく、全教会員が、隠れることのできない山の上の町となっている。

私たちは名目のみの教会員が犯罪に関与したとき、モルモンだとことさらに報道されることに憤慨するときがある。他の教会の信者だったら何も言わないのに、という言い分である。

しかしそれは、私たち教会員に対する間接の賛辞ではないだろうか。世間は私たちにより良いものを期待しており、たまたまだれかがつまずくと、それがすぐニュースに載るのである。実に、私たちは隠れることのできない山の上の町である。私たちが主の望んでおられるようになるには、実際に「選ばれた種族、王国の神権者、聖なる国民、神につける民」とならなければならない。「それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」。（欽定訳Iペテロ2：9）

世が時流を変えずにそのまま進むならば（変わる気配はいっこうにないが）またその一方で、私たちが予言者の教えに従い続けたならば、私たちはますます世から注目される特殊な民となってゆくであろう。具体的に例をあげてみれば、家庭の尊厳が世の圧力に屈して崩壊する一方で、もし私たちが信仰を守り続け家庭を神聖なものとする立場を見失わないならば、その立場はさらに明白に、ますます対照的に際立ったものになってゆくことであろう。

また、性に関する許容の風潮が広まり続ける中で、1世紀余りにわたり一貫して教えられてきた教会の教えは、ますます特異に、多くの人にとっては珍妙にさえ感じられるようになるであ

ろう。

各国で甘い広告に誘われ、年々アルコール消費量が増えている昨今、1世紀以上の昔に主によって定められた私たちの立場は、世にあってますます風変わりなものとなるであろう。

政府が国民の福祉的な要求を一手に引き受けてそれを満たそうとする方向に進む中で、独立して社会奉仕を行なう私たちの立場とその背後にある教義は、ますますユニークになるであろう。

安息日が買物日と変わり果ててゆく中で、シナイ山上で主の指をもって書かれ、近代の啓示でも強調されたあの律法の教えに従う人々は、ますます特異と思われるであろう。

世にありながら世のものとならないことは、常に容易とは限らない。私たちは、まったく自分たちだけで生きられはしないし、それを望んでもいない。私たちは他の人々と交わらなければならない。そうしてこそ、親切もでき、人にも好かれ、独善的な気持や態度を避けることができる。だが、私たちはその中で自分の標準を守らなければならない。さもなければ、世の一般の風潮が私たちを捕えるであろう。現に多くの者がそれに屈しているのである。

1856年、私たちがソルトレーク盆地であらかた孤立していた当時、ある者は自分たちが世との交わりから離れているから安全だと考えた。しかしそのような考えに対して、愛する大管長の祖父にあたるヒーバー・C・キンボールは、こう答えている。「兄弟たち、私はあなた方に言いたい。間もなく今は平和なこの盆地にいろいろな人が混じり合って住み、神の民の敵の顔と聖徒の顔の区別がむずかしいほどになるときが来るであろう。」さらに続けて「大いなる選別のときを用心しなさい。多くの者がふるいにかけてられる時期が

あって、大勢が落ちこぼれるであろうから。試し、試み、試練がやってくると言うのである。はたしてだれがそれに耐えられるだろうか。」(オルソン・F・ホイットニー、*Life of Heber C・Kimball* 「ヒーバー・C・キンボールの生涯」〔英文〕P. 446)

私はこの試練がどのような性質のものか、はっきりとは知らない。ただ、そのときが今で、その試練は世の道に従うのではなく、いかに福音に従うかにかかっていると考えるのである。

社会からの隠遁を唱道するのではない。そうではなくて、むしろ私たちには実業、科学、政治、医学、教育その他価値ある仕事のどれにおいても、自分たちの地歩を固める責任とチャレンジが与えられているのである。私たちには、自分の手と心を鍛えて、全人類の祝福のために世の仕事に秀でるべき責任がある。世の仕事をするとき、私たちは他の人々と共に働かなければならない。しかしそのために、自分の標準を放棄する必要はない。

私たちは、指導者の勧告に従うならば、家庭の尊厳を保持することができる。そうするときに、まわりの人々は敬意をもってその家庭を見、どうしたわけかと尋ねたくなるであろう。

私たちは国家の根幹をゆるがすボルノグラフィーやわいせつの風潮に対抗することができる。アルコール飲料の販売や広告を規制する法律を堅持することもできる。そうするときに、私たちは共鳴する人々を見出し、手を携えて共に闘うことができるであろう。

私たちは困っている人々を政府の手には渡すのではなく自分たちでよく世話をし、それによって援助を受ける人々の独立と尊厳を守ることができる。

私たちは安息日の買物を慎むことができる。他に6日もあるというのに、

わざわざ日曜日に家具を買う必要はないし、服を買う必要もない。少し気をつけて計画すれば、日曜日の食料の買物も簡単に避けることができる。

私たちがこれらの事柄や教会で教えられている他の標準を守るとき、世の多くの人は私たちに敬意を払い、主の道に従うようになるであろう。なぜなら自分も正しいと感じているからである。

イザヤの言葉にこうある。「多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と」(イザヤ2:3)

私たちは妥協する必要はない。否、妥協してはならないのである。

主がこの神権時代に照らしたもうたあかりは、全世界を照らすあかりとなって、私たちの良いわざを見る人々が天にいます御父をあがめ、私たちが示す模範にならうようになるのである。

先日の夜、合衆国のある指導者がワシントン神殿を去るにあたって、塔を見上げながら言った。「この美しい建物は、私たちの偉大な国家、偉大な国民、数々の徳の象徴です。私たちにはそのような象徴が必要なのです」と。

そのような象徴はワシントンの神殿以外にたくさんある。神殿よりもさらに印象的な象徴が。あなたや私に始まって民のすべては、家庭や職場や娯楽の場でさえ自分の身をもって人が仰ぎ見る山の上の町となり、地の民が力を得る国民の旗となることのできる。私は、私たちの生ける神である御方を証し、救い主であり贖い主である御方を証する。また、この神であり主である方々のみ業が真実であることを主イエス・キリストのみ名により証するものである。アーメン。

総大会を人生の転機 とするために

教会の大会は私たちの生活を変える —— 時に
与えられた教訓から、私たちが個人や家族の目
標を立てることによって

十二使徒評議員会補助
J・トーマス・ファイアンズ



愛する兄弟姉妹、今私はこの大会において、大いなる主のみたまを強く感じている。またこのみたまを与え、私たちを導く予言者を与え、またこの部会およびこれから後の部会で私たちの方を高めくれる靈感あふれる幹部の方々をお与えくださったことを、あなた方と共に天父に感謝したい。またこの総大会が教会のひとつの道しるべ

となり、また私たちの生活のひとつの転機となるように心から祈るものである。

過去4年にわたって、教会では偉大な驚くべき奇跡が行なわれてきた。それは一連の地域総大会の開催である。1971年のイギリスのマンチェスターを皮切りに1972年にはメキシコ・シティーで、続いて1973年にはドイツのミュンヘンで、またつい数週間前には、スウェーデンのストックホルムで行なわれたばかりである。恐らくすでにお聞きのことと思うが、大管長会は来年、4つの地域総大会を予定している、すなわちブラジルのサンパウロ、アルゼンチンのブエノスアイレス、日本の東京そして韓国のソウルであり、1975年には実に4倍の成果を収めようとしている。これこそ、スペンサー・W・キンボール大管長の管理運営を代表するものである。

私はこれらの地域総大会の一部始終を見てきて、主のみたまが世界の諸々の国々の聖徒の上に確かに注がれていることを知った。会場設備の確保と準備、報道関係、総大会時の輸送機関、宿泊、食事、音楽、文化活動等、総大会におけるすべての準備は地元の教会指導者が行なっている。私はこれらの聖徒たちとの過去4年間の親交を通して、主が世界中の教会の指導者を導かれていることをはっきりと知ったのである。

地域総大会に出席した会員たちは口々に言っていた。「私たちにあれだけのことができるとは夢にも思いませんでした。私たちは想像している以上の指導性をすでに備えているんです。」ある会員は「それはだれもが予想できなかったほどすばらしいものでした。本当によく準備され、計画されていました。しかも、考えてみて下さい。私たち自身でみんな成し遂げたんですよ。」またある会員は「ここ数週間の準備期間というものは、私の会員生活の中で最良のものでした。私たちがこんなにもタレントや才能に恵まれているなんて思ってもみませんでした」と言っていた。

私はこの会員たちの主への愛を知りまたこの総大会に出席しようとする強い願いも見えてきた。メキシコのチワナの10人の会員たちはメキシコ・シティーまでの48時間のバスの切符を買うために4ヵ月も働いた。そしてせっかくお金をためたのに席がないと言われたときにも、彼らは「構いませんよ。予言者の声を聞くためなら立ってでも行きますから」と答えた。幸いにバスの中でも福音の精神は発揮され、人々は席を譲り合ってみんながわずかの間でも座れるようにしたと言う。

またあるメキシコ人の会員たちは、洪水によって作物に被害を受け、この総大会に出席できないのではないかと心配していた。しかし彼らは、断食と祈りの末、家財をなげうって交通費を集めたのである。食物を買うお金などなかったが、彼らは少しも気にしてい

なかった。総大会が開かれている間は断食して過ごそうと決めていたからである。しかし幸いにも主が彼らの霊に食物をお与えくださったと同じように、愛する他の会員によって食物が分け与えられたのであった。

またスカンジナビアやフィンランドの聖徒たちの反響はその典型的なものであった。「私は会員が『予言者のメッセージを受けられるように霊的に準備しておきたい』と口々に言っているのを聞いた」とある指導者が私に語ってくれた。人々は自分たちの望みをすぐ実行に移した。総大会前の神殿訪問者数がそのひとつの現れである。多くの地域でその数は2倍に増えた。彼らは祈り、旅費を貯え、北国の地からヨーロッパ大陸を横切ってスイスの神殿を訪問し、主との契約を新たにしたのである。

ミュンヘンの大会で、ヨーロッパの聖徒の中にルイジ・ピッティーノという北イタリア地方に住むひとりの老人がいた。このピッティーノ兄弟は17年間も、わずか1、2名の会員と日曜日の集会を開いていた。開会の祈りをして、聖典を読んで話し合い、その後聖餐をいただくというやり方であった。彼らは今や皆70代から80代の老人である。本当に寂しく、孤独であったに違いない。しかしそのピッティーノ兄弟がミュンヘンの総大会で1万4千人の会員と共に座っている感動の場面を想像していただきたい。

マンチェスターでの大会の後、ひとりのイギリスの会員は次のように述べていた。「私は神権会に集った2千人のイギリス人を、しかも皆私と同じ聖なる神権を持つ会員たちを見て、どんなに強い感動を受けたかとても口では言い表わせません。」またある会員は「私たちは今まで共に歩んできました。それは、主のみもとに行きたいからです。」と語っていた。

私は主の大いなる愛がこれらの聖徒たちに注がれるのを知った。人々は数えきれないほどの証、主から受けた祝福、奇跡について語った。それらはみ

な聖徒が主の道に励むときに与えられたものである。祈りに対する答えを得た話、癒しの話、改宗の話、人々の心の扉を開けた伝道の話、また時間と才能とお金とそして自分自身までも主に捧げた人の話などを語ってくれた。

ミュンヘンの大会で、ハロルド・B・リー大管長は使徒パウロの言葉を一部使って、次のように述べた。「私たちはもはや、イギリス人でもドイツ人でもなく、フランス人でもオランダ人でも、スペイン人でもイタリア人でもない。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会のバプテスマを受けた会員であって皆ひとつなのである。」(「聖徒の道」、1974年7月号、P. 324)

ストックホルムでの大会で、デンマーク、スウェーデン、フィンランドの兄弟姉妹がノルウェーの兄弟姉妹と共にエドワード・グレイグ作曲のノルウェー国歌『発見』を歌っていた。その指揮者の言葉は、人々の心を啓発して余りある。「時々私たちは、たとえ教会員同士でも、他の国の人に対して警戒心を持つものです。しかしこのフィナーレは私たちをひとつにしてくれました。今ここには一致のスピリットが何でも力を合わせてできるのだというスピリットがあります。」(「聖徒の道1974年11月号、P 490) その晩出席したすべての人々はこの一致のみたまに包まれていた。数千人の人々が立ち上がって、この4つの国々から成る合唱団に惜しめない拍手を送ったのである。

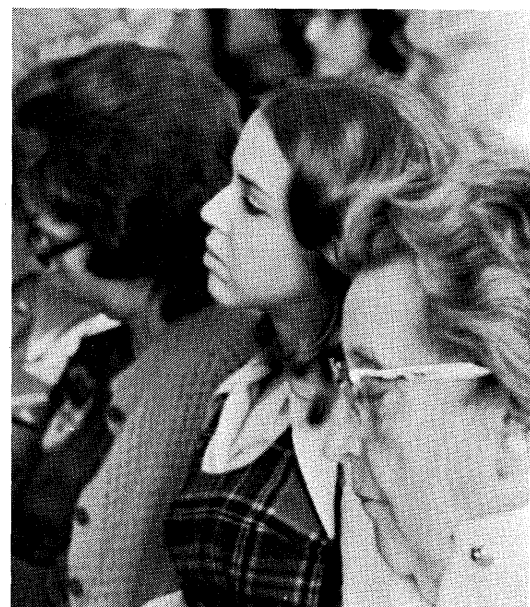
しかし兄弟姉妹、これらの大会を通して私が何よりもまず学んだことは、私たちはいつも神の予言者によって導かれているということである。ストックホルムでの総大会に出席した人は決してキンボール大管長が語ったあの助言とチャレンジを忘れることはないであろう。すなわち「この瞬間から、私たちはこの地に新しい秩序をうち立てるのである。」事実、彼らは変わったのである。私は聖餐会の出席者が驚異的に増加しているという報告を受けている。霊の根は今、この予言者を迎えた地にしっかりと根ざしたのである。

私たちは今この大会に集っているが、大会から何をしようとしているのだろうか。生活を改善することだろうか。家族を向上させることだろうか。それともワード部や支部を変えることだろうか。

問題は、大会を通して「新しい秩序」を私たちの生活の中でうち立てたいと思っているかということである。もしそうならば、私たちがこの総大会に集った理由も明らかである。そう、私たち一人一人が「新しい秩序」で出発することである。

ではどのように進めていったらよいだろうか。ひとつの方法を紹介しよう。それは、大会が終わった後に、この会場から約3千マイルも離れて住んでいる家族の人でも実行できる方法である。大会での説教が掲載されている「聖徒の道」が家に届いたら、すぐに家族でそのメッセージを読むこと。年長の子供には特定の説教について報告をさせることである。

ただ読むだけではない。家庭の夕べにおいて、この大会のメッセージに基づいて家族としての、また個人としての目標を立てるのである。目標は実際に則したものに作る。例えば「毎日の祈りの中に祖母のことを入れる、讃美歌を暗記する、家族の準備状況を点検



する、主の望むことを私たちの方法ではなく主の方法によって行なう、非教会員を教会に連れてくる」などを目標とする。また家族で目標について話し合い、祈って、たびたび検討する。このように進めてくると、次のように語る父親がいてももはや不思議ではないのである。「私たちの家族は総大会を、主が私たちに何をすべきかを教えてくださる機会だと思っています。それは私たちや子供たちにとって言葉以上の深い意味を持っているのです。」

兄弟姉妹、この総大会で受けた教え

は私たちにどれほどの影響を与えるであろうか。両親としてどれほど大切だろうか。また役員教師として、またホームティーチャーあるいは家庭訪問教師としてどれほど重要な意味があるのだろうか。

私はこれまでの総大会の経験から、聖霊に感動して話された言葉は「聖典」の言葉であるということを証する。主は次のように語られた。「聖霊に感じたる時語るころはことごとく聖典の言となり、主の言葉となり、主の声となり、世を救いに導く神の能力となる

べし。」（教義と聖約68：4）

私たちがこの大会で選んだ目標が私たちに、家族に、隣人に、また私たちのワード部や支部の会員たちに救いをもたらすものとなるように心から祈るものである。また神が生きておられることを全身全霊をもって証する。イエスは私たちの救い主であり、またスペンサー・W・キンボール大管長が神の予言者であることを自分の個人的な経験を通してはっきりと知っている。これらのことをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。



引き延ばしてはならない

系図の探求と神殿の業を遅らせる
ことのないように

大祝福師
エルドレッド・G・スミス



ひとりの天使がまだ18歳にも満たないある若者のもとを訪れ、自分は神の御前より遣わされた者であると告げた。この天使こそ、モルモン経に記された最後の予言者、モロナイである。そしてその若者は、ジョセフ・スミスであった。

モロナイは聖書から数多くの言葉を引用して語ったが、それはほとんど、栄光のうちに再臨されるイエス・キリストのために道を備える時がすでにきていることを宣言するものであった。その時モロナイは、マラキの言葉を次のように引用した。「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。」（マラキ 3：1）

この言葉は、主が再び来られるとき、

主は「その宮」すなわち神殿に来られるということを強調している。言い換えるなら、主が来られる神殿が地上になければならないということである。

モロナイはまた、聖書の聖句とは若干言葉を変えて、マラキ書3章の5節と6節を引用した。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。

……彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん」（ジョセフ・スミス 2：38、39）

福音が回復される過程で予言者ジョセフ・スミスに数々の指示が与えられたが、その最初の指示の中で、神殿とそこで行なわれる儀式に関連した事柄が示されたことは、非常に意義のあることだと思う。つまりこのことから、神殿に関する事柄が福音の本質的要素の中でも極めて重要なものであることが導き出せるのである。

このメッセージの中で求められている事柄を満たすためには、神殿がなければならなかった。また、エライジャが神権の権能を携えて来なければならなかった。さらに、先祖の記録を集め儀式を行ない、結び固めが行なわれるという約束を成就する教会員が、いなければならなかった。

神は自ら、アダムとイブを夫婦として最初の家族を設けられた。しかし家族という組織は、ある程度自分が進歩したらその後は捨ててしまってもいいというようなものではない。私たちが最も親しさを覚え、最も高貴さを感じるものはすべて、家族に結びついたものである。愛が家庭の中心であり、私たちは愛のある所に幸せをも見出すのである。まことに、人が独りでいるのはよくない。主はその知恵によって、人がこの地上にあって幸福を得、またその喜びを永遠にわたって保てるように、ひとつの方法を備えられた。最も大きな喜びと幸せは、家族を通じてもたらされるのである。この世の生涯を通してそうであるならば、次の世においてもなぜそうでないと言えようか。

家族は非常に大切である。そのために主は、福千年の終りまでに福音を受け入れるすべてのアダムの子孫が、神権の権能によって一家族として共に結ばれるということを、私たちに明らかにされた。この神権の権能によってこそ、地上において結び固めることは天でも結び固められ、地上において結ぶことは天でも結ばれるのである。

この地上に来るすべての人は、受け入れる気持があれば、福千年の終わる前にこれらの結び固めに伴うあらゆる祝福を受ける機会にあずかるに違いない。そうでなければ、神は公平であるとは言えないからである。

これらの結び固めの祝福を得るためにはまず、バプテスマの儀式を受けてイエス・キリストの教会に入る必要がある。次いで、この世においても永遠にわたっても、夫婦が結び固められることである。また、永遠の結婚誓約のもとに生まれていない子供たちは、その両親に結び固められなければならない。結び固められた子供は、新しくかつ永遠の誓約のもとに生まれたと同様に、あらゆる祝福を受けることができ

るのである。

この律法なしに死んだ者は、身代りの儀式によってこれらの祝福を受ける特権にあずかることができる。ここに私たちの責任がある。私たちはまず、生きている人々に福音を教えなければならない。それから、この律法なしに死んだ先祖の記録を集めて、彼らのためにこの大切な業を行なう必要がある。

末日に福音が回復されると、子孫は心をその先祖に向ける、という約束が先祖に与えられた。この意味は、私たちが先祖のために儀式を行ない、彼らに与えられた約束を成就しなければならないということである。これを行なわなければ、私たち自身の救いも危くなるのである。

バプテスマの儀式だけでなく、家族を永遠の単位として結び固める儀式もこの地上で行なわなければならないものである。まず私たち自身の儀式を行ない、次にすでに霊界に行っている先祖のために身代りの儀式を行なう。これらの儀式は非常に神聖であるので、まさにこの目的のために建てられ、主に捧げられた聖なる神殿で執り行なわなければならない。

近代の啓示の中で、主は予言者ジョセフ・スミスに次のように命じておられる。

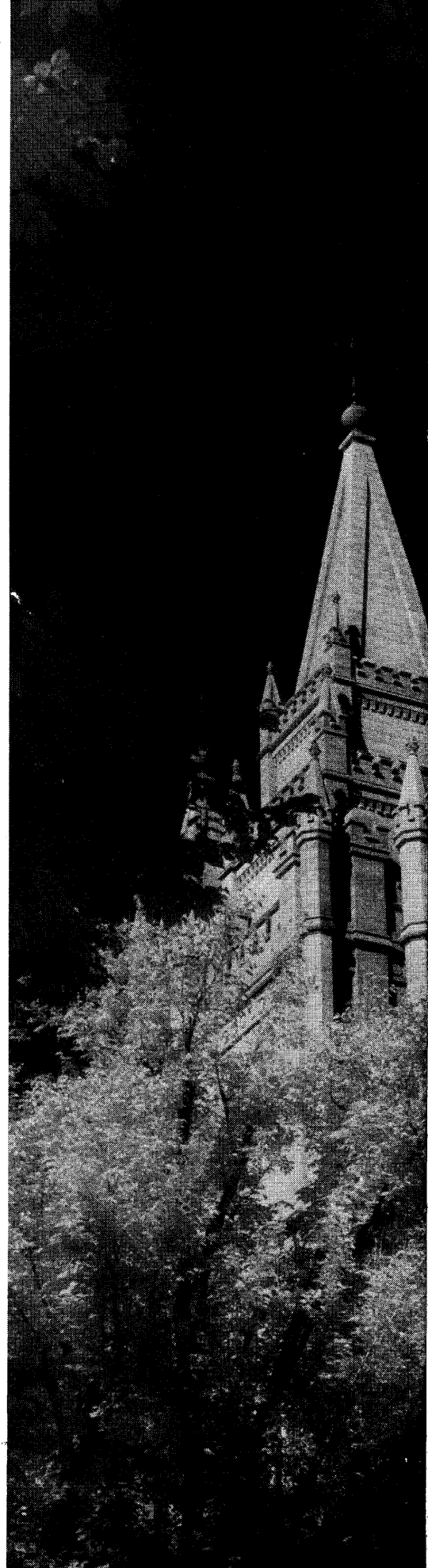
「わが名により、最と高き者の住むべき一つの宮居を建てる。

そは彼来りたもうて、汝らのすでに

失いたるもの、すなわち彼の取り去りたまいしもの、すなわち完全なる神権を再び回復したもう土地はこのほか世に一つもあらざればなり。」（教義と聖約124：27、28）

これらの神殿は、最も重要でありかつ特別な目的のために建てられている。生者はここで最も聖なる儀式を受け、家族は永遠に結び固められるのである。神殿は美しい建物であり、またそうあるべきであるが、それはただ見るためだけの記念物ではない。そこには、生者、死者を問わずすべての義人が昇栄の祝福にあずかることのできる、唯一の道が備えられている。まず生者は来て、この聖なる結び固めの儀式を受け、それを受けた者は先祖に心に向け、先祖が同じ祝福にあずかれるように身代りとして道を開くべきである。

このために、家族の探求を行なわなければならない。この時代に地上に来て、福音を受け入れ、先祖のために神殿の仕事を行なうことができるように、これまで多くの選ばれた霊が天にとどめ置かれてきた。夫あるいは妻、または夫婦だけが改宗し、家族の中で唯一の教会員となっている例を私は幾つも知っている。そしてそのほとんどの場合に、立派な系図記録を彼らかあるいは家族のだれかが持っている。その内のある人々はその記録を一生懸命に神殿に送り、儀式が施せるように努めている。けれども、先祖の名前を送らず、





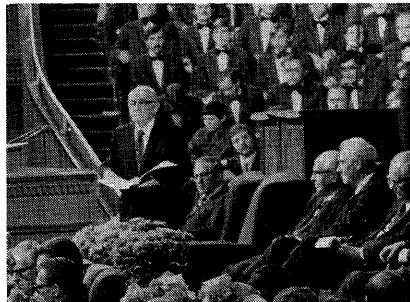
手元に置いている人々も大勢いる。私たちは遅らせてはならない。残された時は少ない。神殿の数が増し、それと共に多くの儀式が行なえるようになった。現在新しい神殿では、毎日約3千以上の儀式を行なうことができるのである。従って記録を手元にとどめていてはならない。所定の用紙に記入し、神殿へ送っていただきたい。

主が幾世紀もの間これらの記録を保存するように人々に靈感を与えてこられたとしても、もし私たちが悪魔の説きつけにのって、記録の提出を引き延ばし神殿の儀式を行なわなければ、主の業はくじかれることだろう。このような話がある。サタンが使いの者たちを集めて、義の軍勢とどのように戦ったらよいか彼らに尋ねた。するとある者が言った。「では行って、それは真実でないと言いましょ。」「いや、そ

れは効果がないだろう」とサタンが答えた。そこで次の者が、「私は半分だけ真実だと言いましょ」と言うと、サタンは「いや、それでは十分でない」と答えた。次の者はこう言った。「では出かけて行って、それはみな真実だ、だが急ぐ必要は全くないと言いましょ。」そこでサタンは「行け。必ずその方法はうまくいくだろう」と言った。ルシフェルに勝利をおさめさせてはならない。私たちは先祖のために主の業を進めなければならない。さもなければ、「主の来る時、全地はことごとく荒れすたれるであろう。」(ジョセフ・スミス 2:39) この地球の行く末は、私たちがこの神殿の業を行なうか否かにかかっていると思う。

忠実な行ないによって自らのふさわしさを証明するすべての神の子に救いと昇栄の祝福を与えるため、福音はこの末日に回復された。そしてこれは決して再びこの世から取り去られることはないのである。地球が存在し、私たちがその地球上で生活しているのは、ひとつの目的があるからである。それはアダムのすべての子孫に、この生涯の間に永遠の家族を設ける機会を与えることである。

ここで証を申し上げたい。この福音は、私たち一人一人に永遠の家族をもたらすため、神権の権威と権能と共にこの末日に回復された、イエス・キリストの福音である。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。



私が教会員となるまで



東京第4ワード部 岡田豊章

1. 生きがいを求めて

3年程前のある夜、本社への転勤が決まった私は、一晩まんじりともせず、自分の歩んできた過去の3年間を振り返っていました。1971年の暮、長崎の寒い夜でした。「この3年間の苦しかった生活、それは私にとって何だったのだろうか。私は確かに努力をした。しかし私は他人を幸せにすることができたのだろうか。」

当時の私は、人生の目的と生きがいを仕事の中に見出そうとしていました。10数名の部下をあずかり、やるべき仕事の目標は数多くありました。私は陣頭指揮をとり、休日にも出勤し、1週間というもの子供たちの寝顔しか見たことがないということも再三再四ありました。しかし、ひとつの屈折点にさしかかって、自分の過去を振り返り、自分の内部を、また自分の周囲を眺めたとき、何も残らない空虚さを打ち消すことができなかったのです。

東京に出てから、ある社会教育団体に加わり、毎日早朝から人生について勉強し実践するという生活を送りました。責任ある役目も与えられ、人間の生き方について、家庭のあり方について深く考え教えられる機会に恵まれました。そして、過去の空虚と思えた苦しい時代が、決して無駄でなかったことを覚り、充実した毎日を送っていました。しかし、時が経つにつれて矛盾もまた目に映るようになりました。それは、集う人々の多くが、現世利益を求め、また団体のあり方も指導者の人々のあり方も、創立者のときとは変化してきているのを感じない訳にはゆかなかったからです。

2. 宣教師の訪れ

そのような時期のある日、ふたりの外人宣教師が我が家を訪れ、たどたどしいがよくわかる日本語で「家庭の夕べ」のプログラムを紹介し、福音を伝えてくれたのでした。

私ははじめに、「私たちは仏教徒であるから家庭の夕べのプログラムは受け入れるけれども、キリスト教に改宗するつもりはないから私たちに教えることは無駄である」と申しました。しかし、外人宣教師はその意味がわからなかったのか、説くことをやめようとしませんでした。そして、日本に来てから1週間しか経っていないという若い宣教師が時々日本語を話すのを不思議に感じながら眺めておりました。(このふたりがハンナ長老とペイン長老です。)

ふたりの宣教師が伝えて下さった「家庭の夕べ」のプログラムは、私の心をひきつけました。ふたりの宣教師は、「このプログラムは、神様が私たちに下さったものです。」「私たちは、家族を大切にします。」と代わる代わる述べましたが、永年の間、家庭を顧みなかった私にとって、やってみる価値のあるものでした。

このようにして、我が家の「家庭の夕べ」が始まりました。1974年の10月のことです。週に一度、月曜日に早く帰宅することは、努力を必要としましたが、末の娘がその喜びを全身にあらわして迎えてくれたことは、大層励みになりました。讃美歌39番の「家庭の中に愛あれば」は私の家族の合い言葉、支えとなっていったのです。

宣教師は、毎週一度訪問してくれました。大層礼儀正しく、親しみ深いふたりに、次第に人格的にひかれ、わずか20歳前後のこの人たちを支えている何か大きな力を感じない訳にはいけなくなりました。こうしてレッスンも続いていきました。

ある日、私の妻は「宣教師たちは、教会から給料をもらっているのではなく、自分で蓄えた費用で、学業や仕事を休んで2年間の伝道にきているのだ」と私に告げました。私は大層驚き、従来私が見知っていたクリスチャン（主としてカソリック系）の人たちとモルモンとは全く違っていると感じました。そして次第に彼らのことを知りたくなりモルモン経を読むようになっていったのです。

3. 出張のときの出来事（初めて祈る）

昨年の11月に、私は大阪である会議を主催しました。午前中の会議を終えた私たちは、大阪府の南端にある或る工場で引続き午後の会議を開くため、地下鉄に乗り難波駅で南海電車に乗換える必要がありました。ところが一行のうちの3人が迷子になってしまったのです。私は会議を主催し、皆を案内して工場まで行き、再び午後の決められた時間から会議を再開する責任がありました。丁度、難波駅は改装中であり、いつもの出入口が閉鎖されていて、土地不案内の者が迷子になる条件が揃っていました。私は懸命に3人を捜しまわりましたが、彼らを見出すことはできず、電車の発車時間は刻一刻と迫っていました。私は仕方なく残った人たちを定刻の電車に乗せ、私はひとり残って彼らを捜し、次の急行電車で最寄りの駅に下車してタクシーで工場へ行くことにしました。そして車の手配を電話で依頼

しました。しかし次の急行電車の時間までに、私は3人を見出すことができませんでした。私は電車の中で、「3人と無事再会し、午後の会議がもてるように」と生まれて初めて父なる天の神様に祈り求めたのです。

私とその田舎の駅に下りると、1台の車が私を待ちました。そのとき私が見たものは、車のそばにいるあの3人の人たち、捜していた人たちだったのです。私を含め4人はすぐ同じ車で会社へ急ぎ、無事に午後の会議を終えることができました。

4. 祈り

私は日曜学校に集うようになっていました。ベネット長老が私たちを教会へ導いて下さいました。求道者のクラスで、伝道から戻られたばかりの山下兄弟がレッスンをして下さいました。黒板には『人間の知恵が尽きたとき、神の英知が開けてくる』と書かれていました。人が努力に努力を重ねてその最後に神の助けを求めるとき、必ず神は私たちを助けて下さるということが、深く心に刻みこまれました。

5. 万国博のモルモン館のことなど

1970年に万国博が大阪で開かれたとき、私たちは長崎から家族で見物にやってきました。暑い夏の日中なのに、どのパビリオンも長蛇の列でした。汗まみれになり、疲れ果てて行列のない静かなパビリオンに入りました。それがモルモン館でした。

ジョセフ・スミスやモルモン経のことなどを聞いたと思います。しかし、当時、仏教徒であると思っていた私には、それらのことがあまりに不思議で真剣に考えてみようとしなかったように思います。つまり、私のテレビのアンテナは、神の電波に同調する方向を向いておらず、電源もオフの状態であったようです。しかし私たちに説明をして下さった外人宣教師からモルモン経を1冊求めて帰りました。本の扉にサインがあります……リチャード・ブラッドレー……それから数年後に、このモルモン経が私に神の不思議な導きを思い起こさせ、私の人生観を変えるほどのことになろうとは、当時考えてもみませんでした。

私はモルモン経を読まないままで本棚に置いていました。

1974年の夏、ハンナ長老とペイン長老の訪れによって、ようやくこの書物の扉が開けられました。

私のアンテナは全く眠っていました。モルモン館で見た映画を、私の妻は良く覚えていますのに、私には全く思い出せなかったからです。長老たちがその映画を私の家で再び上映して下さいたとき、全く生き生きと当時のことが蘇ってきました。ようやく、私の受信機がオンの状態になったときです。

今年に入ってからだったと思います。この頃宣教師はワナー長老とペイン長老になっていましたが、私のモルモ

ン経は万国博のときに求めたものだと話したときのことです。ワナー長老が「ちょっと見せて」と私のモルモン経を手に取り、「オー、私はこの人を知っています」と叫ばれたのです。ワナー長老はリチャード・ブラッドレー長老を知っておられました。そして、ブラウン長老もそうでした。

私は、ブラウン長老からバプテスマのための面接を受け、ワナー長老からバプテスマを受けました。私はそこに父なる神様とイエス・キリスト様と聖霊の御三方の導きを感じずにはいられませんでした。

6. 家庭の夕べ

家庭の夕べを始めたとき、最も喜んでくれたのは子供たちでした。土曜、日曜にはゴルフに行ったりして家にいないことも多いので、早く帰ってきて皆で顔を合わせるのが珍しいことと、ゲームの途中で、「宿題はすませたの」などと無粋なことを聞かれることもなく、天下公認でゲームをする楽しさもあったのでしょう。しかし、二度三度回を重ねると、だんだん新鮮な気持が薄れ、マンネリになっていくのですし、種切れにもなってきます。それを救ってくれたのは、当時まだ8歳になっていなかった、末娘さんと子でした。

彼女は自分で発表を計画し、よく準備し、ゲームを考案し、家庭の夕べをひとりで支える位の大活躍を演じ続けました。彼女に支えられて家庭の夕べは続けられました。

年が改まってから、私たちの家庭の夕べも次第に計画的で充実したものにする努力が見られるようになりました。役割もプログラムも1週間前から決めて掲示し、準備をし、記録もとるようにしました。

こう申しあげても、私たちの「家庭の夕べ」が常に順調で理想的に運営されてきた訳ではありません。でも、私たちは「家庭の夕べ」を通して様々な経験を致しました。そして、神様の祝福をも感ずることができました。私たちはいつも、讃美歌39番「家庭の中に」を歌って始めます。「家庭の中に愛あらば」この言葉は、私たちの家族がまさに求めてやまなかった家族の共通の支えでなくて何でありましょう。讃美歌を歌うとき、心に安らぎが生まれ、皆の心がひとつになっていくのを感じることができます。しかし、当初は家族がバラバラな気持でふざけ合ったり、ブツブツ文句を言ったりしたこともありました。けれども、終りの讃美歌のときに、そのような状態のままであったことは一度もありませんでした。

また家庭の夕べを通して、私は感謝の気持の大切さとへりくだる心の少ない自分自身への反省を深めることができました。

以前このようなことがありました。私は1週間考えて準備をしていました。しかし会社の会議が長びいて帰宅時間が遅れました。司会の長男は、時間がないから急いで、時



間がないから……と、時間のことを連発しました。とうとう私は、途中でかんしゃく玉を破裂させてしまい、楽しい雰囲気は一度にシラケてしまいました。私は自分の至らなさを感じ、これだけ考え、私ひとりが準備したのに家族は感謝してくれないという思着せがましい気持ちが働いていたことを悟りました。自分のことしか考えない、へりくだる心の乏しい自分に気づきました。けれども、カンシャク玉を破裂させたあとですから、取り返しがつきません。でも、家庭の夕べが終ってから、素晴らしいことが起こったのです。それまでは、毎週の家庭の夕べのプログラムは私が中心になって作ってきました。ところが今度は、子供たちがそれを自分たちの手でやり始めたのです。これは私が願っていたことでした。私は何も言わないのに、子供たちが共同ですばらしい家庭の夕べのプログラムを作りあげていくのです。今、私の家の茶の間には、来週の月曜日の家庭の夕べのプログラムが張ってあります。とてもカラフルで、漫画入りで、楽しく書かれています。それは子供たちが作ったものです。

私は、主なる神様が生きていらっしゃる、私たちの家族のためにもすばらしい恵みと祝福を与えて下さっていることを真実知ることができましたことを感謝しています。「家庭の夕べ」は、主なる神様が私たちに下さったすばらしい贈りものであることを証します。

7. 知恵の言葉

知恵の言葉について宣教師から学び、それへのチャレンジを始めたのは、12月21日、まさに忘年会の季節でした。私は、お正月を境にしての、この困難な時期に、知恵の言葉を守り抜きました。私は、意志の力と体の不調を理由にしてこれを守ったのです。

しかし、試しの時期に、このような守り方はもうくも崩れ去りました。私は三度も連続して知恵の言葉を守ることができませんでした。バプテスマの予定日を一週間後に控えてのこの敗北のために、私は監督に申し出て予定日を延期していただきました。

そのとき、私は山下兄弟から祈りの重要さを教えられました。ある兄弟は証のテープを貸して下さり、励まして下さいました。

私は、知恵の言葉を守ることが、イエス・キリストを信ずるか否かということと同義であることを悟りました。私は、神に助けを求め、私の同僚や会社の人々や取引先の人々に、私が末日聖徒として生きる決心をしていることを明らかにしていきました。

私が末日聖徒たらんとしていることを天下に表明することによって、知恵の言葉を守るということは、祝福されて続けることができ、ついに私たち家族はそろって3月15日にバプテスマを受けることができました。

手話で伝える神さまの声

横浜ワード部
田中靖也



私が小学校に入る年に私の父の勤めていた工場が爆発し、そばに居た父はそのため、吹き飛ばされ瀕死の重傷を負いました。腸が10ヵ所裂けてしまったのです。そして今あるかどうか判りませんが、当時、川崎にあった日本鋼管病院に運ばれました。そして奇跡的に助かりました。しかしそれ以来、寝たきりの状態で、外に出て働くことができなくなりましたので、生活の糧を得るため、母が代って勤めに出るようになりました。必然的に私と兄の二人は学校から帰ると母が帰って来て夕食の仕度をするまでに、掃除をしたり、ごはんを炊いたりしました。私はこのような家庭に育ちました。もちろん経済的には恵まれておりませんでした。しかし、隣り近所の人々の温かい思いやりと親切と犠牲的奉仕の中で成長して来ました。

今でもはっきりと覚えていますが、父は丸3年寝たきりだったのがその後少しずつ起き上がれるようになり、私が小学校5年生の時には、家事ができるようになるまで回復しました。それで家計の足しにしようと、山羊を飼うことになりました。山羊の乳をしばってそれを配るのです。このため、私の責任は、学校から帰ると小さな乳母車を改造した荷車を押して八百屋さんや豆腐屋さんを回り、山羊のえさとなる野菜の切れ端や豆腐の残りかすであるおからをもらって来ることでした。小さいながらもその姿を同級生に見られたら恥ずかしいという気持ちがありましたが、八百屋さんなどはいつもこう言って私を励ましてくれました。

「坊や、待ってたよ。坊やのために特別に野菜の切れ端を取って置いたよ。坊やは感心だねえ。いつまでもお父さんやお母さんに孝行するんだよ。明日もまた、取っておくよ。がんばりな」私は本当に嬉しくなりました。そして恥ずかしいという気持ちを持ったことが恥ずかしくなり、八百屋のおじさんが好きになりました。これは一例ですが、私はこ



のように身近な人々から良い模範を示してもらいましたので、悪に走ることなく大きくなりました。私はこの頃から大きくなったら少しでもこれらの人々に恩返しをしたいと思うようになりました。そして少しでも社会のためになるような人間になりたいと考えるようになりました。

恵まれて（今思えば、私のこのような願いを神は聞きとどけて下さったのだと思いますけれど）、私は大学に入ったとき耳の不自由な人に出会い、手話を学ぶ機会を得ました。私はこれを通して、少しでも社会のために尽くすことができるとわかり、夢中になりました。私にとって耳の不自由な人が隣人となったのです。手話通訳を通して奉仕する時にいつも喜びを感じました。そのようなとき私の姉妹と出会い親しくなりました。そして彼女を通じてこの教会を知ることができました。このような考えでいる私がこの

教会を受け入れぬはずがありません。私が初めて彼女から招待を受けて教会の集会に参加したのは、東京ステークス大会でした。そしてペンソン長老のお話で真理を確認することができ、菊地良彦兄弟の家族を愛するというお話を聞いて涙しました。

私は「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。」（アルマ34：32）が真実であることを証します。私は神様の福音に出会ったことを本当に感謝します。私の進歩は遅いですが、終りまで耐え忍んで努力するならば、マタイ5：48にあるように私も天の父なる神様のように完全になることができると確信しています。そして最後に私のこの短い人生の体験から信仰箇条の第13条が真実であることを証します。

4月20日（日）地域総大会準備委員会における証

“大会の経験は人々を変える”

十二使徒評議員会補助 J・トーマス・ファイアンズ



昨年地域総大会が開かれたスウェーデンから1通の手紙が送られてきました。4月8日付の手紙ですからごく最近のもので。読んでみると、地域総大会の後にスウェーデンでどのようなことが起きているかが書いてあります。地域総大会の後に家族のバプテスマ数は倍増したそうです。

大会後、幹部の訪れを受けた国々にはもはや過去に帰ることとはないと何回も聞きましたが、そのひとつの例をお話しましょう。活動の夕べのときにスウェーデンではオーケストラ演奏をする予定でしたが、ピアノを演奏できる人がだれもいませんでした。そこで音楽の才能のある人がピアノを習うことになりました。ケーリー・モービーという人です。彼は町のオーケストラを訪れ、そこのピアノ奏者に会いました。この人は教会員ではありませんでした。

「私はどうしてもピアノを習わなければなりません。教えていただけないでしょうか。」「はい、わかりました。」それから非常に親しい友だちになりました。そしてスウェーデンのストックホルムで開かれた活動の夕べで、彼はオーケストラの一員としてピアノを見事に演奏したのです。このとき彼の使った弦は250ドル以上もする高価なものでした。教会員でないそのオーケストラのピアノ奏者から教会員であるモービー兄弟が借りたのです。そして去年の12月、このピアノ奏者リーパーさんはバプテスマを受け、教会の会員となりました。

このような話はいくつもあります。今まで教会に来てい

なかった人が来るようになったこと、非教会員の改宗、また靈感を受けて高められたことなど、地域総大会を通じていろいろなことが起こっているのです。今日ここに集まっている私たちは、すべて地域総大会を経験することによってさらに素晴らしい会員になるに違いありません。なぜならば私たちは他の人々に奉仕をするからです。

私は予言者ではありませんが、ここで予言してみたいと思います。日曜日の午後、大会がまさに終わろうとするときに、皆様方の目には涙が一杯あふれるに違いありません。だれにも見られないように、ハンカチを出して涙をぬぐうことでしょう。この大会から受ける感動は、それほど大きいのです。大会のたびごとに私の目は涙で一杯になります。でも決して恥ずかしいとは思いません。

皆様方一人一人の上に豊かな祝福がありますように。そして全員が一致協力してこの大会のスピリットを盛り上げることができるように、また私たちの指示により働いて下さる人々が、スピリットをもって働くことができますように。神が生きたもうこと、イエス・キリストが私たちの救い主であり、私たちが予言者、聖見者、啓示を受ける者をいただいていることを証します。そして予言者は私たちにその歩幅をいっそう伸ばすように望んでいらっしゃいます。この地域総大会にたくさんの人々が集うことによって、主のみ業がさらに進展するように予言者は望んでおられるのです。

